

ある、就中田川村の狸付と稱する怪物は、佐州の團左衛門の如く、妖怪の巨魁であるさうだ、若し村内に病人あれば狸付に悩まされるゝなりと信じて居る、又人の旅立せんとする場合には、鍋又釜の蓋を頭上に戴き、庚申を拜禮して、家を出づるをさまりとしてある、是れ道中災難除のまじなひだといふことである、又家を明けて出づるときは、入口に鬼と書したる符を張付けて出づれば、盜難の恐なしと信じて居る、或は又路上にて癩病患者の如きものに會し、或は其者より物品を受取りたる場合には、己の手に唾を吐きかれば、傳染せぬと申して居る、是等は、賣岐の迷信の主なるものだ、

第百九十七話 大島の迷信

伊豆大島に狐なき代りに、魎が人を誑すと信じて居るものが多い、死靈生靈方位山明船幽靈を恐るゝものもある、婦人が發熱して精神に異

状を起し、時々譫語を發し、内地の所謂狐附の如き状態になるを風オリといふさうだ、同島中特筆すべきは、毎年正月二十四日より五日にかけて、イミと唱ふる迷信がある、其夕は船幽靈が襲ひ來ると信じ、家毎に深く戸を鎖して外へ出でず、牛を厩内に置くことを忌み、之を山林に放つさうである、又讃岐の一離島の如く、大島にても昔時は月經かゝれる婦人は、隔離室を設けて此に入らしむるさまりであつた、之をヨグラといふが、蓋し汚穢の意であらう、維新後之を廢して其跡に小學校を建てんとしたれば、不淨なりとて村民の反抗を招いたとのことぢや、

第百九十八話 琉球の迷信

琉球にて魂のことをマブイといふが、身を守るの義であるさうだ、小兒が途中にて仆るときは、マブイをコメルと稱して、地から物を拾ひ上げて懐中に入るゝ、眞似をして、之を三回繰り返すがさまりである、又

病氣にかかりたるときには、魂が外へ出て、身の守りを失ひたるによると信じて居る。又琉球にはユタと名くる巫女の如きものが澤山居る。恰も八丈島の附屬たる青島は一村に滿たざる程の小島でありながら、八十人計りの巫女があり、醫者の代用をすると同じく、琉球人は己れの家に病人あれば、直ちにユタに見てもらふことになつて居る。是等は琉球の迷信の一例である。

第百九十九話 臺灣の迷信

「臺灣にては生蕃人も臺灣人も共に中々迷信が深い。生蕃にては旅行中噓するときは、大凶事ありとて家に引き返し、決して外へ出ぬさうだ。又婦人は夜中外に出づるときは、幽霊に遇ふとて恐れて出ぬ。其幽霊は首のない化物だと申して居るは面白い。内地の幽霊に足がなく、生蕃の幽霊に首がないのは、實に好一對である。臺灣人の幽霊は耳目鼻口すべ

ての孔口より血が流れ出て居るのが多い。是れも面白い考へてある。又妻が妊娠すれば、其夫謹慎して外出せぬ蕃族ありとは奇怪なる迷信ではないか。臺灣人の方には一層迷信が多いが、其一例に彼等は死者の腦味噌を取り出して食するといふことぢや。是れは一種の迷信より起つて居るに相違ない。是れは朝鮮人の尿を口に銜み、又は尿にて顔を洗ふの迷信と稍々似たるものであらう。

第二百話 日本は迷信國

世界中何れの國にても、多少の迷信のなき處はないが、我日本などは頗る迷信の多い國の中に數へ込まねばなるまい。雲州美保の關に名高い神社があるが、之に參詣する人は、粃米の種子をもらひ受けて歸り、之を田畑に植れば、何んでも所望の植物が出来、且つよく實のると信じて居る。又肥後上益城郡の六嘉村には、足手荒神の小社がある。之に參詣す

るものが板にて足の形を作りて獻上すれば、すべての足の病氣がよく
なると信じて居る、又筑後の善導寺に産婦が參詣し、門に入りて初めて
出會したる人男ならば、必ず男子を産し、女ならば女子を生む、又本堂の
戸を開くときに、其戸重ければ難産にして、輕ければ安産なりと信じて
居る、又伊豫宇和島の和靈社は、舊藩臣山邊清兵衛の靈を祭りたるもの
なるが、其一代記が佐倉宗吾の如く芝居に組立てられて居る、其芝居を
興行するときは、必ず雨が降るといはれて居る、東京にて水天宮の日に
は必ず雨がふり、又近來は水曜日にはさつと雨がふるなど、申すもの
があると同様の迷信だ、此等の迷信は一々擧ぐることは出来ぬ、

第二百一話 復讐の變則

余が上州磯部温泉に入浴せしこと前後三回であるが、其時之を人に
聞いた、先年失火の爲に林屋と稱する温泉旅館と其隣家の菓子屋とを

全焼せしことがある、焼失後兩家の間に火元に付て争論を起し、林屋の
方が勢力ある爲に奔走の結果とう／＼勝訴となり、菓子屋が火元なり
といふことに決定した、然るに菓子屋の主人は深く之を遺恨とし、一度
其怨を晴らさんと心掛け、林屋の再築落成の期を待ち居り、愈、其期に達
し、大に廣告して落成式を擧ぐるや、菓子屋の主人夜竊に新築の座敷に
忍び入り、上段の間に於て割腹して自害を行ふた、其後林屋に止宿すれ
ば菓子屋の亡魂が出づるとの風評が立ち、何人も恐れて其家に宿泊
するものなく、遂に廢業の止むを得ざるに至つたといふことを聞いて
居る、是れ世の迷信を利用したる迷信であらう、

第二百二話 犬神の勢力

四國は犬神の本家本元である、犬神は其形見るべからざるも、一種の
妖怪にして、其物の住する家とは一般に結婚するを嫌ふて居る、若し其

家の人が、誰にても悪しと思はゞ犬神忽ち其人を惱まして病を起さしめ、又其家の者が人の美食を見て之を好むの念を生ずれば、犬神來りて其人に取り付き、或は其食物を腐敗するに至ると信じて居るものが多し、犬神の家は四國中阿波に最も多く、阿波中池田町に最も多しとの由にて先年池田町に至り、取調べたことがあるが、近來小學教育の普及するに當り、大に犬神の勢力を減じたりと申して居る、普通教育の効果が大なること此一例を見ても分る、此犬神が大分縣、宮崎縣の一部分と、山口縣に傳つて居るが、是れは四國より傳染したるものに相違ない、元來四國が犬神の本場、他はその出店である、

第二百三話 出雲の人狐

出雲の名物は人狐である、百五十年前より其地に入り、次第に繁殖したと傳へて居る、其實物なりと稱して保存せるものを見るに、剛の一

種である、多分雌剛ならんといふ説ぢや、此物一定の家に住し、七十五頭同居し、其家と結婚すれば其人狐移り來ると信じて居る、余は雲州に入るに先ちて左の豫吟を試みた、

會揮哲劍拂諸魔、跋涉妖山與怪河、我入雲州先欲問、人狐消息近如何、

第二百四話 隱岐の猫憑

隱岐は島前島後の二部に分れ居るが、島前の方には人狐持の迷信が流行して居る、其始は今より凡そ百年前出雲より傳へ來りしとのことだ、近來は其勢力出雲に下らず、現に人狐派非人狐派ありて、社交上に影響あるのみならず、政黨までに影響を及ぼして居るさうだ、然るに島後の方には人狐の代りに猫附なるものがある、蓋し隱岐には野猫が多い、昔時は野猫の人を害することがあつた爲に、猫附の迷信を呼び起したらし、

二百五話 石州及び因州の迷信

石州の迷信は犬神、トウビヤウ、外道である、犬神は長州より入り、トウビヤウは藝州より入り、外道は備後より入り來つたものらしい、トウビヤウとは蛇持、蛇附のことである、又石州にて口寄、神寄を「教へ」と名けて居る、濱田邊にて海上に難船ある毎に、人の呼ぶ聲がする、其聲にてアカトリをくれよと叫ぶ、是れは海中にて溺死せし幽霊の呼聲である、と信じて居る、次に因州にてはやはりトウビヤウの迷信がある、然し其トウビヤウは蛇持にあらざして、一種の獸類で出雲の人狐に近い、其住する家には人狐の如く七十五頭同棲すると信じて居る、同じ鳥取縣でも伯州の方は雲州に接して居るから、人狐の迷信が多い、

二百六話 河太郎の怪

九州にては河太郎、即ち河童が人に附くと信じて居る處が諸方にあ

る、就中五島と對州とに多い、五島の富江村には河童の築きたる城壁が残つて居る、又鹿兒島にては河童の鳴く聲を聞くと申して居る、又同所にて毎年五月十六日は河童の御前迎と稱して、其日に決して水中に入らぬ、若し入らば必ず水難にかゝると信じて居る、御前とは妻のことにて、婚禮を意味するのである、肥後天草にも河童の怪あるか、其災を免かるゝには熊野の十二社に三社を加へて十五社にしたるものである、之を信仰すればよいと申して居る、薩州にては河童のことをガラツバと申す、伊豫及び石見ではエンカウといひ、又ガンガウといふ處もある、佐賀ではカウソウといふ、川僧の意味らしい、出雲ではカツコといふが、河童の字に當る、或は熊本縣葦北郡にてはカゴといふ、併しガゴはすべての妖怪を意味して居る、此河童が夏時に川に入りて住し、冬時は山に移りて棲む、其山にある方を山ワラフと申すさうだ、山童の訛りであらう、

其形は見えざれど、足痕と鳴聲で分るといふて居る。足痕は爪の數三つあるのみ、鳴く聲は、鋸を引く聲に似て居るさうだ。此カゴは他の地方の天狗話と同一である。

第二百七話 附物の種類

以上述べたる附物の外に、佐渡には貉附があり、群馬縣埼玉縣にはオサキ附があり、木曾には管狐の附物が居る。此管狐に出雲の人狐と同じく、七十五頭同棲して居ると申す。其家と結婚せざるのみならず、其家にて所有する田地は賣らうと思ふても、買手がないうさうだ。飛驒にては之を牛房種と名くるは面白い、牛房の種は人の衣服につき易いから起つた名に相違ない。東濃にてはトリツキ筋と申して居る。是れ皆大同小異である。

第二百八話 願成否の占

青森縣にて池中に錢と米とを紙に對して投入し、其紙速に埋むときは願事叶はずと申して居る。然るに島根縣八重垣神社には錢一文を紙に封じて池中に投し、直ちに沈むときは願事叶ふといふは、双方正反對である。肥後阿蘇郡宮原町鏡池に錢の形が時々水底に見えて來る。其數が毎日違ふと申し、之に就きても色々の迷信を唱へて居る。又美濃國稻葉郡鏡村及び揖斐郡谷汲村に石地藏がありて、之を持ち上げ、其輕重によりて願の成否を卜するが、此輕重の占も諸方にあることぢや、又之れと少々違ふけれど、佐賀縣三養基郡内綾部八幡神社の秋季皇靈祭の日に幡を懸け、其幡の風に卷かるゝ有様によりて、風災の有無を判斷し、又同郡千栗八幡宮にては、舊曆正月粥を炊き、其釜の上に箸を十字形に渡し置きて、之を肥前肥後筑前筑後の四ヶ國に分配し、以て各方面の豊凶水旱如何を判知する古來の慣例である由、現今にても之を行うて居

るさうだ、

第二百九話 紙錢

琉球にて墓前に向ひ祖先の供養をするときに必ず紙錢と申して、白紙に錢の形を捺したのを火にて焼く風俗がある、其譯を聞くに紙錢を焼けば其錢が冥土の亡者の手許にとくと信じて居る、臺灣人がお祭に竹紙と稱して竹にて製したる黄色の紙を盛んに焼く、其紙に金色又は銀色を塗りつけてある、是れは支那内地より輸入するが、其一ヶ年の金額は五十萬圓に上るといふことぢや、之を焼くの意味は其金を神佛の方へ傳送する爲である、多分琉球の紙錢は此臺灣又は支那内地の風俗が傳つたものであらう、

第二百十話 異風のマジナヒ

志州鳥羽地方にては四月八日に煎じたる甘茶を以て墨をすり、此墨

にて白紙に卯月八日とかきて、戸壁に張り付くれば、百足が來らぬと信じて居る、越後魚沼郡では此甘茶は目の藥になると申して居る、佐賀縣にては百日咳をチヨツキと名くるが、之を直すマジナヒは、拘子に人の顔を畫きて、之を路傍に建て、千人に見らるれば全治すると信じて居る、熊本縣にては畑の芋を盗むを防ぐマジナヒに、板の上に人の手の形を印して建て置けばよいといふ、房州鋸山に石に刻したる五百羅漢があるが、其首は大抵なくなつて居る、昔より捕徒のマジナヒに、此羅漢の首を懐中すれば、必ず博奕に大勝を得るとの迷信が傳はりて居つた爲に、ひそかに山上に登りて盗み取りたる故であるとのことぢや、又長州大津郡大寧寺の古き摺小木は、其長さ五六尺餘もあるが、此摺小木を削りて、其木片を持ち歸り、之を治病のマジナヒにする、恰も信州諏訪明神社の佛柱を削りて、瘡を落すマジナヒにすると同様ぢや、マジナヒの種類

も一々述べ盡くすことは出来ぬ、

(妖怪の奇談は餘り澤山ありて、此に掲げ盡くすことが出来ぬから、別に其類話を集め異なりたる表題の下に發行する積りである)

第十三類 俗説俗解

第二百一十一話 妖怪迷信の俗解

支那の文字は形象字にして、文字の形を分析すれば自然に意味が分る、依て妖怪の文字に就きて、余の臆説を述べて人に話したことがある、妖の字は若き婦人の義にして妖術を行ふものは若き婦人に多いから、妖は若き婦人より起るの意であらう、又怪の字は或は惟と書き、心に在るの義にして、怪は心より生じ、心の中に存在するの意であらう、又迷信は印度支那日本の如き米食本位の國多い、是れ迷の字は米の字を體と

して居る譯ぢや、此の如きは余の漢字に就きての俗説俗解である、

第二百一十二話 精進の字義

余が時々話すことだが、昔し瀬戸内海を小蒸氣に乗りて渡つたとき、隣に坐して居る二三の連中の一人が、魚肉を食せぬことを精進といふは如何なる譯かと尋ねたれば、他の一人が答へて精の字は米邊に青いといふ字をかくから、精進日は魚も鳥も牛も食せず、只青物と米のみを用ふる故であらうと申した、余は傍に居て圖らず吹き出すに至つた、是れも俗説俗解である、

第二百一十三話 唐津寛林

九州の絶勝は耶馬溪と虹松原とを以て第一とする、虹松原は雅名寛林と稱し、唐津より濱崎に至る間にありて、二里の松林である、之を虹と名けしは二里より轉じたりとの説と、其形虹寛に似たるによるとの説

と二様がある、近傍には名護城を始めとし、豊臣秀吉に關する舊跡が多いが、寛林も秀吉に附會して夏時蟬聲を聞かざるは、秀吉が練兵の節號令をして聞へ易からしめん爲に、蟬の口を封鎖せしに由る、又松樹が地に向て平伏するが如き狀あるは、秀吉の威勢を畏れしに由るといへる俗説あるは笑ふべしである、

第二百十四話 臺灣に於ける誤解話

余が臺灣にある時、米作本位の地方にてヒシウ組合、ヒシウ掛り、ヒシウ技師などの語をたび／＼聞き、心に想像して肥料の掛のことならんと思ひ、肥の字は分りたれども、シウの字が分らぬから、是れも想像にて、すべて肥料は臭氣のあるもの故、ヒシウの文字は肥臭とかくに相違なからうと思ふて居た、是れは余の俗解である、後に文字を見れば、埤圳とかいてある、此字を臺灣音にてヒシウと讀み、用水灌溉のことぢやと

聞いて、大笑をしたことがある、

第二百十五話 切手賣捌所

日露戦争後、滿州の安東縣日本市街に郵券賣捌所を設け、店頭に切手賣捌所の看板を懸けたれば、支那人之を見て大に驚き、日本人は手を切て賣るとの評判を傳へたといふ奇談を聞いた、漢字の方から讀み下したらば、手を切りて賣ると解するは無理ではない、

第二百十六話 彗星の俗説

本年一月、連夜彗星の見えるより種々の俗説を喚起し、愚民を騒かすに至つた、其當時千葉縣を巡回せしに、各所にて今年は婦人の厄年に當り、若い婦人は病氣にかゝる年である、其厄拂するには赤飯を携へて、石の鳥居七箇所をくゞり、各所へ赤飯を差上げねばならぬとの風説が傳はり、若き婦人は互に誘ひ合ひ、三々五々列をなして石の鳥居のある

社を尋ねて參詣する最中であつた、其説の起りたる原因は不明なれども昔より彗星の出づるときには災難があるとの迷信が根本となり、之に枝がさき葉がつきて、斯る妄説を流傳するに至つたらしい、明治の今日猶ほ此様なる迷信騒ぎあるとは、奇怪千萬ではないか、

第二百十七話 丙午に就ての俗説

明治二十九年の春頃、大和地方を巡回せるに當り、京都より二三の有志が尋ね參り、本年は丙午の歲なれば必ず大火あるべしとの評判が立ち、京都市中丸焼になると申して、各町寐ずに火の番をする騒であるから、京都の市會議事堂に於て丙午の迷信打破の演説をして呉れとの依頼を受けた、依つて歸路京都へ立寄り、一席の演説を試み、丙午の恐るゝに足らざる所以を説明したことがある、京都の大都會すら此の如してあるから、山間僻地に至つたら當に火災を恐るゝのみならず、其年内に生

れたる女子は成長の後に人に嫁することが出来ぬとて、出産の届出を見合するものすらあつたとのことぢや、つまり古來より丙午の女子は男子を殺すとの俗説が傳つて居る爲である、其由來は十干の方にて丙は火の氣の強い性であるのに、十二支の方では午は火の氣の盛んなる性である、其二者が合體したから其年に大火がありとの俗説が起り、又女子は其性柔順なるをよしとするに、丙午の氣を受けて生るときは火の氣の盛んなるが如く、男子を壓倒するに至るとの者より、丙午の女子は男子を殺すなどの俗説を起したのである、

第二百十八話 朝鮮人の俗説

日露戦争の後、日本人が續々朝鮮へ押しかけて行いた、而して其翌年雨天が數十日に涉りて續いたことがある、さうすると朝鮮人が申すには、日本は雨の多い國であるから、日本人が己れの國より雨を持ち込ん

て来たといひて、日本人に向て不平を唱へたさうた、

第二百十九話 燈臺の幽霊

昔し越後の出雲崎の海岸に始めて燈臺を設け、毎夕點火し來りたれば、遠方において之を望むものは、海上にて死せし亡者の靈魂か出現せるなりと思ひ、一時海亡魂の評判が立ちて騒ぎたることがあつた。古來火に就きての俗説迷信は頗る多い、而して燐火を見て幽霊となす俗説は今日猶ほ各所に信せられて居る、

第二百二十話 守札の滑稽

播州明石町に人丸神社のあることは世間に知れ渡つて居るが、其社は申すまでもなく、歌よみの聖人といはるる柿本人丸を祭つた社である。此社より火除の御札と安産の御守を出して居る、余其事を聞き、何故に歌神と關係なき守札を出だすかと或る人に尋ねたるに、其人笑てい

ふには、是れ愚民の誤解より起つた、音便上人丸は、火止る又は、人生るに通ずるから、火止る神様と解する點より、火除の御札を出すに至り、生る神様と解する邊より、安産の御守を出だすに至つた次第であると、此く聞けば守札にも滑稽のあることが分り、互に笑ふたことがある、

第二百二十一話 友引の俗説

世に六曜と稱して、日を六日づゝ計へ立つる方がある、其二日目に當る日を友引といふ、其日葬式を行ふときは、友を引く爲に七人相續きて死亡するの不幸を見ると、東京などにては大に之を恐れて居る、若し其日に葬式を行ふの止む得ざる場合には、人形六個を棺中に入れて葬れば、其災を免かるゝを得べしと云へ傳へてある、故に現今でも人形を以て代理させることを實行して居るが、文明の今日、日本第一の都會に猶ほ斯る迷信俗説の行はるるは嘆すべき次第である、

第二百二十二話 天狗の祟

越前池田地方は美濃に接し、山間の一僻郷である。地位僻遠なれば人智隨て開けず、日清戰役後浮塵子多く發生して、秋穫を見ざることがあつたが、其時村民相傳へて申すには、戰時中は山々の天狗が皆滿韓へ渡りて、日本軍の應援を爲し其も蔭で百戰百捷の大勝利を得たのである。然るに目出度我邦の大勝利となりて局を結ぶに至り、軍人には夫々勳章を授けられたれども、天狗に對して禮祭を行はざれば、天狗大に怒り、塵浮子を放ちて國民を苦しむるのであるとの妄説を唱へたさうだ。然し斯の如き愚民の妄説は獨り池田地方に限つた譯ではない。

第二百二十三話 山神の相談

池田地方の妄説に類した話が東北にもあつた。余が先年山形縣庄内地方を遊説中に聞いた話であるが、其以前國會の始めて開設せらるゝ

當時に於て、一夕光物が響を傳へ、鳥海山の方より月山の方に飛ぶのを見た、其時愚民等は是れ鳥海山の神様が國會の運命に關し相談せんとて、月山の神様の方へ立越されたのであると申したさうだ。

第二百二十四話 志州の米食

志摩の國は日本中の最小國にして、三面海を繞らし、耕地に乏しければ、村民多く漁業に従事して居る。常食は甘薯と麥のみでありて、米は正月にあらざれば用ひぬ處である。然るに他國より其地に來りて小學教員を勤めて居るものがある。彼れは麥飯を嫌ひ、毎日米食のみを致して居つた。さうすると近隣の者が争て其家の下水兩便を與へられんことを頼みに來る。其譯は百姓等は平素米食をなすものゝ下水兩便は之を肥料に用ふるも、一層效驗のあるべき道理なりと信じて居る爲だ。米の貴重せらるゝこと此通りであるから、毎日米食をなすものは一粒た

りとも粗末にせぬやうに心懸ねばならぬ、

第二百二十五話 傳染病に就いての俗説

支那人は傳染病者の身體に觸れたる衣服は焼き棄てよと申しても、中々承知せぬ若し燒棄たならば忽ち其毒が空中に散して四方へひろがり、益々傳染する様になると、妄説を主張して居るさうだ、又滿洲にベストが流行しても毫も豫防に注意せぬ、其譯は彼等は外より病毒傳染するにあらずして、地中より毒の氣が発生するのであると信じて居るからだといふことが、右等の話を聞けば誰も笑ふけれども、我邦も數十年前の昔は同じことであつた、明治十二三年頃に虎烈拉病の流行したことがある、其時に群馬縣を旅行して或る村落に入らうとするとき、路傍に假小屋をかけ、其中に神棚をかざりてある處に呼び止められ幣束を取りて御攘を行ふた、是れが今日の消毒法に當るとは面白い、其次に

再び虎烈拉流行せしときは、御攘をやめて人の頭から衣服まで悉く石炭酸をふりかくることになつたが、是れは一段の進歩とはいへ、随分亂暴の消毒法だ、

第十四類 産婚葬祭

第二百二十六話 臺灣の産婚

臺灣人の從來の風習にては、子の生れたる後一ヶ月目に、團子をこしらうて人にくばり、四ヶ月目に餅を桃の形に作りて之を頒ち、一ヶ年目に餅を龜の形に作りて之を分つのが出産の祝である、又婚禮の時には新夫婦相對して一器の中に盛りたる團子を二個づゝ取りて、互に食するを禮とするさうさ、此團子は我内地の三々九度の杯に當る、西洋にては婚禮に砂糖にて作りたる菓子に、貴ふが如く、臺灣にては團子を貴ふ

風である、砂糖を貴ぶ譯は親密を意味し、團子を貴ぶ所以は圓滿を意味し、共に祝意を含んで居る、

第二百二十七話 大島の産婚

一伊豆大島にては出産の事に就て別に記すべき程の事なけれども、出産後七夜に達するときに祝がある、其外に最も盛んなるは七五三の祝である、其時には子供の爲に衣服を新調し、紋付までを拵へて宮参りをなし、且つ人を招きて會飲をなし、馳走を配附する等、莫大の出費が入る、一度其祝をなすときは平均八十圓位もかゝるとのことにて、其爲に負債を起すものある程とのことぢや、毎年正月には十二日間は家族の生れ年の十二支をくりて、正しく其の日に當れるときに祝して酒を飲ませる風習である、平素は山に入りて炭薪を取り、儉約して蓄へたる金銭を時々祝酒を傾くる爲に無くしてしまふと聞いて居る、人を招きて會

飲するときには、一人の酒量平均壹升二合位を要すとの話ぢやが、話半分と見ても大層のものである、因て余は

炭を焼き薪を賣りて米を買ひ、残るオアッて酒をたつぷり

とよみて、笑ふたことがある、すべて大島にては會飲ありて會食なしと申すが、食物の方はあまり客に差出さぬ由である、次に結婚の模様を聞くに一層奇怪に感ぜらるゝ、婚禮の節は新郎外に出て、家に居らず、新婦は其實家にありてタスキ前垂にて働き居る、愈々親類友達客人打揃うた時に、其働いて居る新婦を引き來り、其家の土間の處に立たせ、決して座敷には上げぬが禮である、是より客人に對して饗應が始まる、其間に新婦は逃げ出して實家に歸るさうだ、其夜は新郎の方で新婦の方へ泊りに行き、其翌朝新婦が水を汲みて持ち來るとのことぢや、大島にて嫁入のことを足入と申して居る、是等は餘程古代の風が残つて居るに

相違ない、結納には手拭草履等七品を用ふる由である、

、第二百二十八話 新島及八丈島の嫁入道具

伊豆七島中の新島にて婦人が他家に嫁するときの三道具は、花桶と水桶と糞桶との三品である、花桶は新婦の役目たる毎朝墓場の掃除をなすときに用ふる爲とのことぢや、此島では祖先の墓を一番大切に、新婦の仕事は毎日の墓掃除であるさうだ、水桶は飲用水を汲む爲なれば宜しいが糞桶に至つてはチトびつくりする持参品である、次に八丈島にては入婚の際箆筒長持の代りに屏風を持ち行くことが古來のきまりであるもめづらしい、而して新婦の衣服は不斷の儘にて宜しいといふことだ、

、第二百二十九話 掠奪結婚

古代の結婚に掠奪結婚と申して、男子が婦人を奪ひ去りて自家につ

れ來り、妻とする風があつたが現今にても我邦に残つて居る、熊本縣の阿蘇郡内に毎年一月中に嫁を盗むといふことがある、少女が田畑に働いて居るのを奪ひ來りて、自宅につれ行き同棲する、斯くして三月に至り、正式の結婚を行ふとのことぢや、之と同じく八丈島にても今日掠奪結婚の風が傳はつて居る、又臺灣にて聞くに生蕃中の或る一社には、掠奪結婚の風があるさうだ、

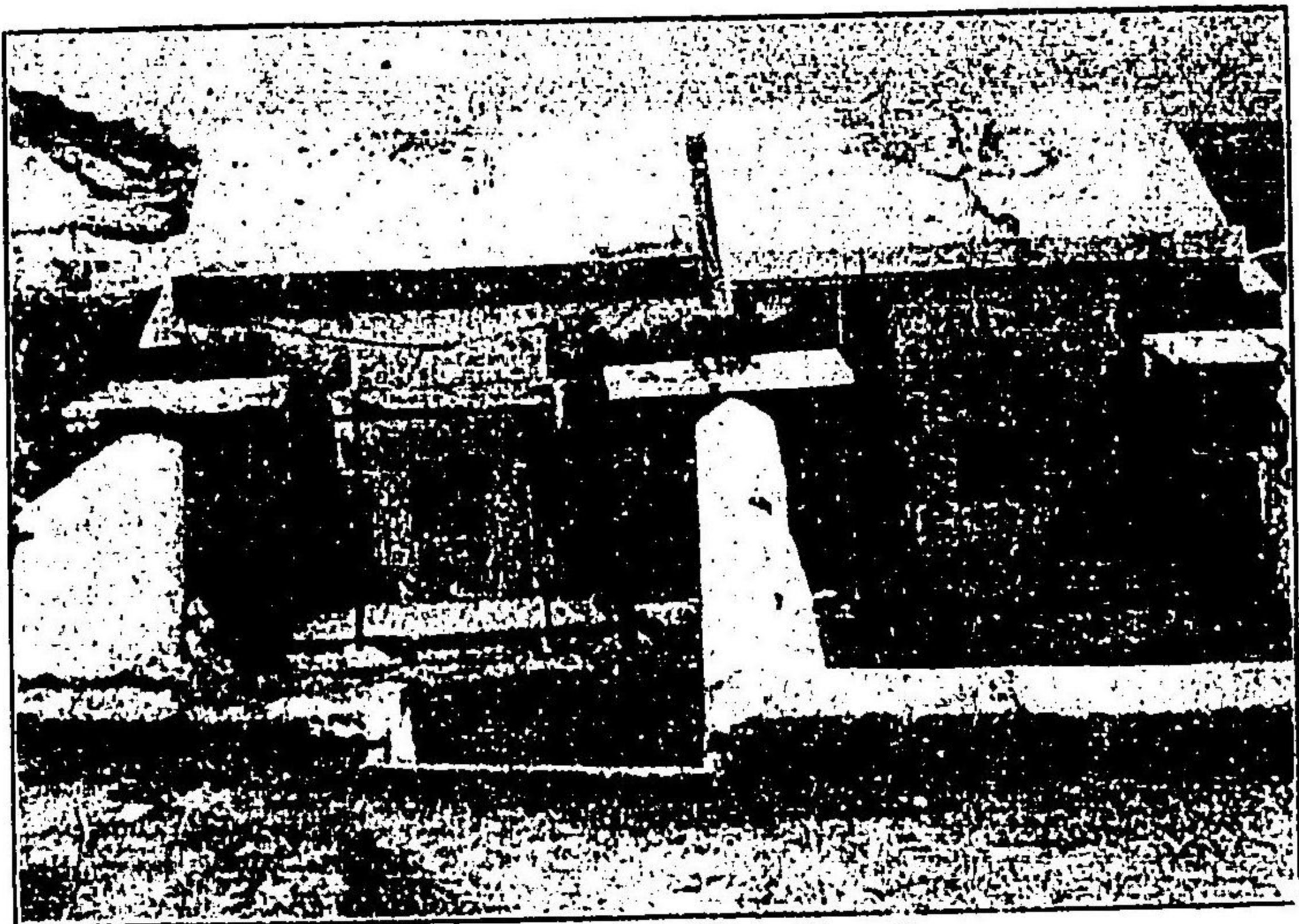
第二百三十話 出金求婚

臺灣人は支那式であつて、妻を迎ふるに男子の方より必ず出金せねばならぬ、其金が求婚の結納となる、自然に其金を出すことの多い方に嫁入をするといふ風であるから殆んど身賣のやうなものだ、其求婚の金高を聞くに少なきは六十圓、多きは二三百圓より八九百圓千圓にも至るといふことぢや、已に金を以て買入れたる妻であるから、貧困に陥

りたる場合には、妻を賣つたり質に入れたり、借財の抵當にも妻をあてはめるさうだ、如何に金銭主義でもこれでは人倫の道を没してしまふ譯だ、但し我邦でも昔は妻を質に入れたことがあると見えて、朝酒は嫁を質に入れても飲めと傳へてある、古代には何れの國、何れの地方にても婦人は物品同様に見なされたに相違ない、

第二百三十一話 琉球の葬式及び墳墓

琉球にては支那の如く葬式の時に人を雇ひて泣かしひる風習なるが之に一升泣、二升泣等の別ありと聞く、即ち泣者に對し其泣方の度に應じて或は泡盛一升、又は二升を給與する意味であるさうだ、又世界中墳墓の壯大なるは琉球の右に出るものはなからう、如何に長崎の墓が立派でも到底琉球の比較にはならぬ、一家の墳墓の建築費、其粗なるものにては、五六千圓以上を



(十四) 産婦葬祭

沖繩縣の墓場

かけるといふことぢや、遠く之を望むに石造の居宅又は土蔵の如く見ゆる其家窮困して田畑家屋を賣却するも、墓所は賣却せず、之を最上の財産としてある、若し之を賣却すれば、其地には住居が出来ぬ、又死人のある場合に屍骸を棺に入れたる儀、墓場に置き、三年経て洗骨式を行ひ骨を洗つて瓶に納める習慣であるが、是れは埋葬にもあらず、火葬にもあらず、其の中間の葬法であらう、

第二百三十二話 葬式の號泣

琉球の葬式には泣婦をして伴行せしむるも、伊豆大島にては泣婦の代りに各戸の女子に幼少の時より泣哭の稽古をなさしめ、葬式の讀經始まるや大聲にて泣き上くといふことぢや、其語は何某のカネンボシ、ニシヤナセウチンダヨと叫ぶ由、カネンボシとは愛すべきの意である、此泣聲が盛なる爲に御經の聲も打ち消さるゝ程に賑やかさうだ、愈々葬式が済むと、會葬者の中で誰某の泣方がよいとか悪いとかの品評があるとのことだ、寺の住職の話に、島の葬式に慣れて内地に行くと、あまり葬式が寂しく物足らぬ様に感ずると申して居る、すべて婦人は葬式の時には五ツ紋の衣服を着し、紫色の鉢巻をなし、帯は前の方にて結び、男子は白衣をはをり、白帛を三角形に折りて頂につくるをさまりとしてある。

第二百三十三話 八丈島の葬式

八丈島にても葬式の時に棺の家を出でんとするに當り、婦人の號泣するを例として居る、棺には長く善の綱を結び付け、之に親類は連りて行く、死骸を容るゝに棺桶を用ひず、其代りに大瓶を用ひ、其底に穴を明けてあるといふことぢや、是れは死體より出でたる水を下へ漏らす爲てあるう、

第二百三十四話 朝鮮の墓所

朝鮮の葬式は支那式で、やはり泣手を雇つて泣かせる方だ、墓場も支那風で、土を餛飩形に盛り上げ、別に石碑を建て、せぬ風である、若し人の死したる場合には墓地をさめる爲に方角を占てもらふ、其方に向つて葬場を設けるから、一家眷族親子兄弟皆墓場の所在が違ふ、依て先祖以來の墓場を一々記憶することが六ヶ敷いそうだ、夫故時々墓場の訴認が起ると聞いて居る、

第二百三十五話 北海道及び小笠原島の葬式

全國中葬式に多大の資を投ずるは北海道就中函館を第一とする、上下貧富を平均して一回八十圓位と聞いて居る、琉球の墓場と好一對てあるすべて新開地は意外に葬式を賑やかにする風がある、北海道では人が死すれば多数寄合つて通夜をする、其時に酒肴の仕出で賑かである、若いものが死ねば一層賑かにするそう、又北海道では人が死んでも墓場を設けぬのが多い、必ず屍骸を火葬にして白骨を寺にあづけて置く、其故に各寺に骨堂を設けてある、是れは何時内地へ歸るかも知れぬから、歸る時に骨まで持て行く爲である、小笠原島の葬式が此通り酒肴を出して賑かにする、且つ葬式の時には一村皆親戚同様であつて、誰もかも集つて會葬するそう、だ、新開地としては、さも有りさうなことだ、然るに東京の葬式通夜に酒肴を用ふるは例外である、

第二百三十六話 人の死を意味する語

伊豫温泉郡にては人の死したることを廣島へ綿買に行けりといふ、又同じ國內にても越智郡にては廣島へ茶買に行けりといひ、新居郡にては廣島へ烟草買ひに行けりといひ、豊前及び石見にても人の死したるときに廣島へ綿買ひに行つたといふ、蓋し死といふことを忌みなる爲なるも、之を廣島に限りたるは其理由解し難し、又長州萩にては長崎に茶買ひに行いたといふも、長崎とさめたる譯が分らぬ、之に反し筑前の新平民は女子が他家に嫁したるときに、某女は死に場が出来たといふも面白い、

第二百三十七話 海を隔て、葬式を行ふ

石州美濃郡鎌手村に屬する孤島にして、海上三里を離れたる處に高島と名くる小島がある、周圍約一里にして、戸數僅かに六戸に過ぎぬ、冬

期は船の通ぜぬこと數十日に及ぶことがある、其時節に死人ありたる時は海岸に出て、火を焚きて報知をする、其の火を見て陸上の寺院より僧侶出て來り、遙かに其島に向ひ海上三里を隔て、讀經引導をなすといふが、三里離れての引導はめづらしし、

第二百三十八話 自葬祭

信州松本領内にては維新の際、廢佛廢寺を實行し、民家の葬式は神式にあらず、佛式にあらずして、其戸主たるものに一定の弔文及び祭文を作りて渡し、是を朗讀せしめたそうだが、是は自葬祭と申したらよかる、其後寺院は復活せしも、安曇郡の如きは殆んど無宗教同様である、僧侶は各宗の讀經を一通りづゝ記憶して禪宗の家にすれば禪宗の經を讀み、眞宗の家にすれば眞宗の經を讀み、祈禱も行ひ、マヂナイもなし、八宗兼行するにならざれば糊口が出来ぬと申して居る、

第二百三十九話 奇祭

日本全國中神社の祭禮に奇怪なる古俗を傳ふるものが多い、其中に三大奇祭とも稱すべきは、豆州伊東の尻摘祭、紀州日高郡丹生神社の笑祭、遠州見附天満宮の裸體祭である、伊東にては毎年十一月十日の夜、音無明神の祭がある、其時は燈火を用ひず、暗黒の中にて執行ひ、神酒を賜はるときは尻を摘みて次へ次へと盃を廻すから、尻摘祭の名が起つた、又日高郡上和左村にては毎年十月初卯の日に、一同幣を捧げて丹生明神の社前に至る、其の中で年長者が發聲して笑へ笑へといふに應じて、一聲同音に笑ふ、其笑ふ由來は十月は神無月と稱し、諸神皆出雲の國に到り給ふに、此神ひとり後れて行き給はざりしを笑ふのである、見附の天満宮は古來の遺風にして、神輿をかつぐものも送り迎へするものも、皆裸體になりて奉供する故に、裸祭といひ傳へた、其他肥前唐津町

を距ること三里、港町に灰を吹き散らす祭がある、之を灰降祭といふが、是又奇祭の一である、其他全國の祭禮を取調べて見たなら、奇祭も澤山あるてあるうい

第十五類 風俗習慣

第二百四十話 會津の正月と飛驒の正月

會津若松にては正月元旦に餅を食せずして蕎麥を食し、二日はトロ、を食し、三日に至りて始めて雑煮を食する風なるは珍らしい、而して大晦日には鹽鮭を食し、之を残して新年三ヶ日間少々ツ、喰ひつゝ、のがよいとしてある、次に飛驒の正月は必ずブリ魚を食するさまりである、又其奇なるは大晦日に歳暮に廻るのみにて、元旦は終日戸を締切り松かさりもせずシメ縄も張らず、平臥して休養して居るといふ面白

き風習である、

第二百四十一話 土佐の風俗

今より二十年前土佐を一巡せしことがあるが、土佐の風俗習慣は他國と大に違ふて居る、先づ土佐人は暗夜而も深更に提灯を用ひず、山坂を踏えて歩くことを少しも苦にしない、又婦人が進んで演説を聞き、而も理屈ばりたる話を喜ぶ風がある、旅行中奇異に感じたるは、夜具の敷蒲團が煎餅よりも薄きこと、旅館に急須茶碗を有せず、茶釜の中より湯呑に茶を汲むこと、食事の香々は必ずチヨクに入るゝこと、チヨクを香々入と申して居る、此風は鳥取縣と一致して居る、松鯉魚のナマを半焼にして、刺身の代用にする、こと、便所は住家を離れて設くること、墓場の粗末なること、人力車の構造と提灯とがヒトフウ變つて居ること等、色々珍らしく感じたるものがあつた、然し今日は其頃よりは大分變つた

さうだ、

第二百四十二話 宮崎縣の風俗

日向宮崎郡にては從來稻を刈り取り、之を粃の儘にしてカマス(藜藎)にて作りたる袋に入れて貯へ置、小使賃を要するときに、之を白米に仕上げ、町に賣出す習慣であるから古來米俵を用ひたることがなかつた、近來郡役所の獎勵によりて漸く俵を用ふるやうになつたと申す、實に太古の風である、村落に警報の梯子があるが、其上に半鐘の代りに板木を懸けて置く、又川あれ共堤防がないなど、随分文化の程度があくれて居る様に感じた、

第二百四十三話 球磨の風俗

肥後球磨郡は地勢上自然に別天地を形づくりて居る處なるが、人の他郷に出づるときは、たとひ書生が遊學に熊本へ向け出發するにも、男

女相伴ひ、大鼓三味線にて二三里先までも見送る風がある、又旅立する人が人吉より川舟に乗込む時に、水を振りかけるが禮であるさうだ、余の出發の時は他國人であるから、幸に水を掛けらるゝ難を免かれた、酒は琉球の泡盛と同様のものを用ふ、之を球磨焼酎と申して居る、其杯が如何にも小さくして愛らしい、然し只今では汽車が開通したから、風俗も追々變るてあらう、

第二百四十四話 伊吹島の風俗

讃州觀音寺町を距ること海上四里、伊吹島と名くる一島がある、戸數約三百昔時は物差なく、衣を造るに絲繩を用ひて寸法を定め、たさうだが、明治十九年小學校を開設せし以來、始めて物差を用ふるに至つたと申す、又其島にては年長者を貴ぶ風ありて、先年村役場にて村長の年齢よりも小使の方が長者であつた、爲に小使が村長の實名を呼びすてに

し、村長が小使を様付にしたといふ奇談がある、

第二百四十五話 跣足の習慣

日本中跣足の最も多きは臺灣琉球、小笠原島にして、其次は鹿兒島縣、其次は佐賀縣であらう、琉球人にして天然痘にかゝりしものありて、全身痘を發したるも、足の底のみに發せぬ、愈々痘の全快せんとする頃足の底一面離れて落ちたさうだ、是れは小供の時より跣足の習慣ありし爲に足の底の皮が鐵の如く堅くなり居り、痘が外部へ發することの出來ざりし故である、

第二百四十六話 蚊帳の習慣

臺灣琉球及び小笠原島は終年蚊帳を用ひて居る、斯る土地に久しく住して内地に歸るものは、蚊帳なき處にては安眠し難しと申す、其譯は臥床中天井より蛇百足の如き毒蟲の落ち下らんかの疑懼心が起るさ

うだ、是れも習慣である、然し實際内地より右等の島に行くときは、冬期大寒の時でも色々の蟲が居るから、ヨシ蚊が居らなくも蚊帳なしては安眠が出家ぬやうに感ずる、已に前にも述べたる如く臺灣ではヤモリが室の中に澤山居て、天井の間で夜中鳴いて居る、此ヤモリの尿が皮膚に觸るれば、忽ち腫れ、眼に入れば目がつぶれるといふが、其話を聞いた丈でも蚊帳なしては安心が出来ぬ、

第二百四十七話 坂路上下の習慣

伊勢山田の旅館にて、客の歩き風を見て直ちに大和吉野郡内の人なるを判知すと云ふ話がある、蓋し吉野郡内は人家點々山腹に散在し、隣家に行くにも數十間の坂路を上下せざるを得ざれば、自然に足を高く擧ぐるの習慣がついて居る、故に平地を行くにも高く足を上下する風がある、此風を一見して忽ち吉野郡内の人たるを察するのである、臺灣

の蕃人は峻阪險路の間に住居して居るから山路を歩くには非常に達者なれども平地を歩かせると忽ち閉口するといふが是れも習慣である。

第二百四十八話

隣家用語を異にす

筑後三潞郡大川町の内に舊柳川領と舊久留米領と比隣したる處ありて西隣は人の間に答へてエーといひ東隣はナイといふ又佐賀縣の鳥栖町の中に舊佐賀領と對州領とが混じて居るに今日尙ほ言語が違ふて居るさうだツマリ古來の習慣怠力の然らしむる所である。

第二百四十九話

田畑の輪耕

世に輪耕と稱して年限を限りて山林と畑とを轉換して耕やす法があるが隱岐の如きは其一である隱岐にては牧場と畑とを轉換し畑地として四年間耕作すれば更に牧場として四年間牧畜をなす即ち耕牧

輪轉法を用ひて居る伊豆大島にても畑地と山林とを輪轉し凡そ十四五年間山林として薪木を培養すれば更に十四五年畑地として麥薯を培養する習慣である之を切替畑と名く八丈島も此切替畑を用ひて居る其外飛驒の白川郷が此輪耕法により十五ヶ年間山林にし之を焼拂ふて五ヶ年間畑とするきまりである其事を焼畑と唱へて居る又臺灣の蕃界がすへて輪耕法である。

第二百五十話

婦人の勞働

沖繩縣即ち琉球と伊豆大島とは婦人の却て男子よりも勞働する處である二者共に婦人勞働して亭主を遊ばすを以て己れの名譽とする而して婦人に権力なく男子の壓制の下に屈從するの風である又大島は婦人の體格姿勢のよきは他に多く見ざる所にして其屈強なるものに至りては頭上に米二俵即ち二十貫以上を載せて運び得ると申す。



此様に兩島共に似て居る所あるが、亦違ふ所がある、即ち琉球の婦人に被髮左椎なるも、大島は一般に結髮して居る、又大島婦人は鉢巻をなし前垂を締める風あるも、琉球には此風がない、

第二百五十一話 頭戴の風俗

婦人の頭上にて物貨を運搬するは、朝鮮、琉球、伊豆七島のみならず、紀州の熊野、志州の東海岸、薩州の枕崎、京都の北山、伊豫の松前、豊後の臼杵(鶴村)等諸方にある、蓋し南洋の風俗を傳へたるものであらう、北海道ア



大島婦人の頭戴

子を揃て長さ材木を頭上にて運搬すること、琉球の婦人が頭上に豚の子を戴き、小便かけられながら走ることに、志州海岸の婦人が糞桶を頭上に戴きて歩くことであつた、糞桶に至つては萬一桶の底が抜けた

ら大變てあらう、又大和吉野郡天川村にては、婦人が頭戴はせざれども、背^せ上^りて重量^{りやうりやう}の物を運搬^{りんぱん}する力は、男子も及ばぬ程である。

第二百五十二話 男女不同席の風俗

琉球の男女間の關係は儒教主義にして、男尊女卑は勿論、互に席を同ふせず、男子の客來には男子獨り之に應接し、女子の客來には女子のみ之に接見し、公道を通行するにも、男女列を異にする風である。結婚の約束は幼少の時に定め置くのきまりである。其他の俗謠に、猥褻に渉るものなきは美風と云はねばならぬ。又女子に再婚を許さざるは貞女不見^{ていぢよにふけん}二夫の教に本づくものであらう。

第二百五十三話 戸口の割合

日本中土地の面積に比して人口の最も多い國は淡路といふことだが、一戸の人口としては飛驒の白川村が第一である。現今にても一戸の

家族四十五六人の家がある。其大字御母裝の如きは一戸平均十五人半の割合になる。其次は越前國坂井郡鷹巢村字清水谷であらう。其一戸平均が十三人三分餘に當る。之に反して伊豆大島の如きは一戸平均三人位の割合である。其少なき譯は親子別居する習慣があるからぢや。八丈島も親は別に隱宅を構へて別居するきまりである。

第二百五十四話 隱岐の實況

隱岐の風俗習慣物産等は余の耳目に觸れたるだけを集めて詩中に納めて置いた。

碧灣多出入、全島事農漁、風定海垂釣、天晴家晒魚、山田當牧畜、土窟藏甘薯、生計皆農富、年々食有餘。

隱島多名物、錫魚爲最優、野猫狡於犬、蹄石潤如油、菱浦聞盆曲、中條見鬪牛、風光明且美、到處洗吟眸。

各處に土窟を見るは常食たる甘薯を貯藏する爲である其第一の名産たる錫魚は穴のあきたるを以て特色として居る生咋磨墨の名馬を出せし地より黒光石の其形馬蹄に似たるものを産出する盆踊及び鬮牛亦其他の名物である毎朝茶粥を食する風習は京都奈良に似て居る

第二百五十五話 五嶋の實況

肥前五嶋の民家は戸毎に石垣を繞らすは防風の爲である路上農夫に遇へば此帽を脱し頭を低れて過ぐるは美風である山に樹木なく路に茶店なきは暑中の旅行には困難に相違ない其實況は詩に寫して置いた

五島窮邊轉法輪、草鞋竹材設修身、
耶蘇教夙開荒地、河太郎時憐賤民、
船有幽靈人有禮、路無茶店酒無醇、
我來驚見山皆秃、唯喜寒村校舍新、

第二百五十六話 滿韓の實況

朝鮮旅行中見聞に觸れたる所は詩を以て寫して置いた

自入朝鮮僅一週、四邊事物射吾眸、
白衣戴帽如神葬、黃被纏身似鬼游、
豚小屋中家族坐、土饑頭下祖先休、
口銜長管吹煙處、可見韓民意氣悠、
尋到朝鮮八道亭、欲觀風俗暫時停、
腰頭運水石油罐、車外質茶麥酒瓶、
屋晒唐辛半村赤、山留松葉一分青、
韓人雖漫誇儀禮、臭氣滿家衣亦腥、
奉天の實況は左の通りである

第二百五十七話 帽子の見せ物

余昔し奥州白川より會津に入る途中、勢至堂嶺を上り、一茶亭に休憩したることがあつた其時は夏の土用中にて、東京より風變りの帽子を被りて旅行したが、愈々其茶亭を去らんとするに、傍らに置きし帽子見當らず、如何にも不審に堪へずして、頻りにあちらこちらを搜索する内

に、茶亭のカミサン帽子を携へて歸り來り、餘り珍らしき帽子であつたから、近邊のものに見せに廻はつてきたと申ししたが、此一例に考へて、何に撲直なるかが分る、

第二百五十八話 楯岡の旅館

山形縣に楯岡と名くる町がある、此町に昔し一等旅館が二軒あるのみにて、其外に二三の旅店あれども、極めて下等であつた、余は同町の青年會の主催にかゝる講演に出席する爲に、天童町より此に移つたが、二軒の一等旅館が平素大競争を構へ居る由にて、青年會が余の宿所を定むるに双方各己れの方にて引受けんとの競争を起し、有志者が仲裁して一方へ極めんとするも、中々承知せぬ、其結果二軒の内へは孰れへも宿所を定めぬといふことになり、下等の旅亭へ余を案内して宿泊せしめた、旅館かたきの感情の爲に無關係の余まで迷惑を受けたるは残念

のやうなれども、余の如き無位無官のものゝ爲にこれほどまで競争したりしかを思へば、嬉しきやうにも感ぜられた、

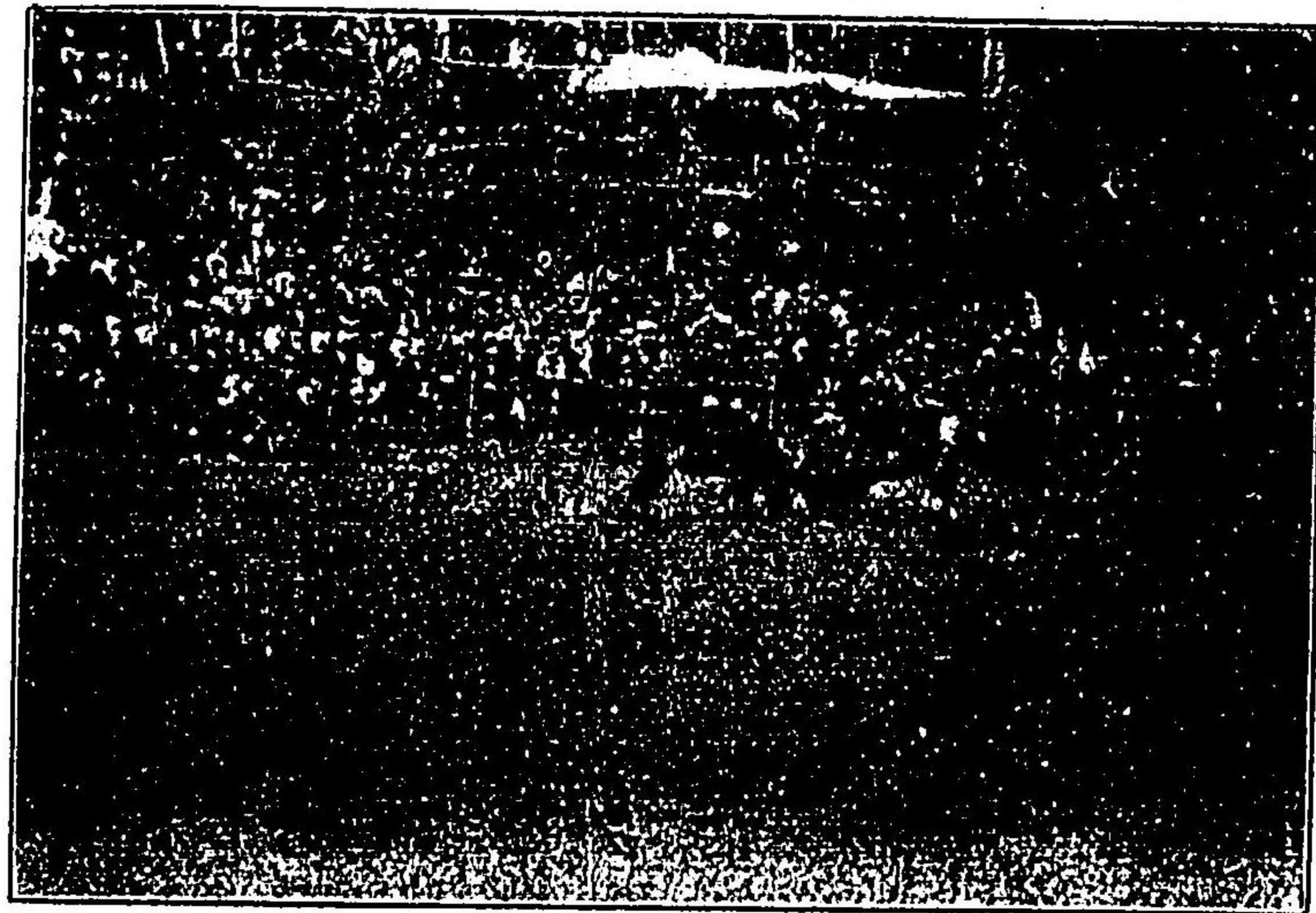
第二百五十九話 淡路の結髪

今より二十年前余が淡路國を一週せしことあるが、各演說會場に於て聽衆中に結髪者が澤山居る様に見受けた後、發起者の話を聞くに、男子の一分は今日尙ほ結髪して居るさうだ、其原因は島國にして他と交通の少なさと一體の風が保守的なることによる、淡路人は日本先開の國と稱して、自ら誇りて居る位なれば、何事も自然に保守に傾く勢である、

第十六類 娛樂遊興

第二百六十話 闘牛

世界中に闘牛の娛樂といへば、すぐに西班牙を思ひ出すけれども、西



隱岐の海士闘牛



伊豫宇和島闘牛會

班牙のは人と牛との闘である、然るに牛と牛との闘は日本に限る、其中に最も世間に多く知れて居るのは越後古志郡の山間二十村の闘牛である、之を牛の角ヅキと申す、其次は伊豫の宇和地方である、其名を牛相撲といふ、其次は隱岐にして名は牛ヅキと唱へて居る、八丈島にも昔しは闘牛ありし由なれども、今はすたれてない、右の中實際最も盛んなるは隱岐である、余は島後の中條村にて實見した、其闘牛の遣り方は越後などと違うて、双方タツナを執りて闘はして居る、毎年全島中の牛が集りて大仕合をなし、其勝負に應じて番附を作ることになつて居る、是は實に隱岐の名物である、

第二百六十一話 土佐の闘犬

阿波人は競馬を好み、土佐人は闘犬を好むと申すが、土佐の闘犬は中に盛なものだ、平日特に犬を養ひ置き、闘犬の場合に各所より其犬をつ

れ行き双方より一頭づゝ出して柵の中に入れ、將に斃れんとする迄闘はずさうだ、余が巡回中にも近村に闘犬ありとて聴衆皆其方に吸収せられ、演説會の成立たぬことがあつた、然し其闘犬の實況を見ざりしは、今に遺憾に思ふて居る、

第二百六十二話 琉球の野遊

琉球にはモ遊びと名くる遊びがある、モは毛にして、野原で草を筵として遊ぶのである、夏の月夜に多く此遊びをするさうだ、其島の風として男子が三味線を弾て歌ひ、女子は集りて之を聴くだけである、其故に男子にして三味を知らぬものはない、平常にても男子は家に居て三絃を弾じ泡盛を傾くるが、何寄の樂みであるとのことぢや、酒に強きものは一度に泡盛五合位を呑盡くすさうだ、

第二百六十三話 八丈の踊り

八丈島では躍が名物であつて、中々盛んである、薯焼酎を呑みながら環状をなして躍る、其有様は船の波にゆられて居る様に、身を高くしたり低くしたり、浮きつ沈みつ動搖しつゝ躍り行くのである、蓋し船の黒潮にたゞよふて居る形に似せたものかと思はる、其歌ひ方の懸聲調子は全く東京のキャリに似て、極めて樂天的である、而して其躍る人は男子にして、女子は只見物するだけだ、右は八丈固有の普通の踊りだが、其外にトノサ踊り、ヒチャ〜踊りなど色々の踊り方がある、又音曲としては大鼓を打つ遊びがある、其打方が一風かはりて面白い、

第二百六十四話 隠岐の盆踊

盆踊は日本中に各所にあるが、所謂豊年踊である、其中隠岐の盆踊は一さわ盛んなるものだ、余が同島の菱浦に滞在せし時、有志家數名相集り、最初に有名なるドッサリぶしが始まり、後に盆踊が起つた、愈々盆踊

に移りたれば、國會議員も村長も名譽職も出掛け、下女下男皆打まじりて、客舎の二階も落るばかりに盛んなる大踊となり、極めて樂天的で、壯快を感じたことがある。

第二百六十五話 奥州の盆踊

盆踊は奥州の方にも行はれ、青森縣は殊に盛んである。余は駿ヶ澤に滞在中、盆踊に會し、終夜安眠を妨られて閉口したことがある。其中で黒石が第一との評判である。津輕の名物は弘前のネブタと黒石の盆踊と並び稱せらる程ぢや、又福島縣の磐城平邊にて盆踊の代りに、ジャンガラ踊りといふものがある。新佛(死人)のある家の前にて踊るといふことぢや、

第二百六十六話 越後の食仆れ

余の郷里は越後であるが、越後位に食事の盛なる處は少なからうと

思ふ、上方では京都の衣仆れ、大阪の食仆れ、堺の建仆れと唱ふるが、越後は食ひ仆れの方でありて、比較的食物は奢つて居る方である。否、無藝大食が多い方である。其大食には原因がある。昔しよりオタチと唱へて、一通り食事の済んだ後に御客に對し、更にお鉢を改めて食さするさまりである。故に人に招かれたる時には、一度に二三度の分の大食をする譯ぢや、之をオタチといふ。謙信の遺法だと申して居る、むかし謙信が愈々戰場に向て出發する際に世間ていふ鞋酒の代りに鞋飯をたべさする規則であつたといふことぢや、其遺風からオタチの名が起つたとの傳説である。則ちオタチとは出發の義らしい、余も此事で生長したから、無藝大食の方であつたが、近頃は其附で極々の少食家に變つてしまつた。

第二百六十七話 浮立と狐はなし

佐賀縣にては田植上り又は稻刈の後、若くは早天つゞきの場合に、人氣を引立つる爲にとて大鼓を鳴らし、鐘をたゞきつゝみな打ち、假面を被り躍りつゝ騒ぎ立つる風がある、之をフリフと名く、其文字は浮立とかく、即ち人氣を浮き上り立たしむるのであらう、肥後にては御祭騒ぎの後に酒宴をなすを狐はなしと申すが、騒ぎの熱を醒す意味だといふことぢや、狐の付きたるを離して正氣に歸らしむるの意であらう、之を豊前ではイタジキバラヒと申して居る、

第二百六十八話 拳戰

酒興の時にケンを戰はずことは何方にもあるが、九州には特に拇戰といふよりは寧ろ拳戰といふべきものがある、之をナンコといふ、鹿兒島に最も流行して居る、其次は熊本である、後者は前者より複雑にして其趣が違ふ、其調子は眼を丸くし、聲を怒らし、喧嘩の如き態度である、又

熊本縣内にては球磨郡は一種異なりて、拇戰の方である、其方法は他と同じからず、親指を出すものは五手を握るものに勝ち、一差指を出すものは親指に勝ち、中指は人差指に勝ち、五指開くものは中指に勝ち、五指握るものは開くものに勝ち、其他は無効にして勝負なしと云ふ規則である、其遣り方が一番學術的であると思ふ、

第二百六十九話 烟管の種類

烟草は人生自然の要求あるものと見えて、北海道のアイヌも、臺灣の生蕃も、皆烟草を嗜んで居る、其烟管に就きて余のめづらしく感じたるは、臺灣人の烟管である、是は全部竹で出来て居る、其次は志摩國の海岸にて用ひて居る烟管である、其首は小サソイ貝を拾ひ來り、之に穴を穿ち、竹管を差込て烟管にする、極簡單にして皆手製である、又紀伊の熊野地方と肥前の五島三井樂地方とは烟管を用ひず、其代りに椿葉を用ひ、

之に烟草を卷込巻烟草の如く吸入する風である其の兩所とも婦人が皆喫煙して居る是れは烟管を用ひざる昔の風を傳へて居るのであらう、

第二百七十話 五爵一堂に集る

千葉縣地方にして八名旅館に會して晩酌せしことがあつた其館の規則として下女をして客の酌をなさしめぬさまりである故に列座互に酌をなして是れ男酌であるといふ其席に郡視學ありて酌をなし是れ視酌であると申す余亦酌をなす人評して博士の酌なれば博酌であらうといふ又校長座にあり酌をなして曰く是れ校酌なりと最後に村長立て酌をなして曰く余は公吏の一人なれば其酌は眞の公酌なりと申したれば皆笑て曰く公侯伯子男の五爵一座に集まれりと申したることがある、

第二百七十一話 泉聲と語聲

鳥取縣八頭郡安井驛客中一夕村内の有志家數名と會飲し坐談大いに熱して夜の深けるを知らず人々散する時時計二時を報するに至つた其家の庭前に飛泉の落下するあるも醉後には其音も聞えぬ程に盛んであつた時に詩を賦して其實況を述べて置た、

未酌泉聲壓語聲、已醉語聲壓泉聲、夜深酒盡人將散、更漏報來第二聲、

第二百七十二話 江差の西洋料理

先年北海道檜山郡江差町に滞在中一夕懇親會に招かれて出席せしに西洋料理の積りなりしも江差に肉がないから其前日二十里離れたる函館へ翌朝の馬車便にて牛肉を送れとの注文を電信にて申込んださうだ當日の六時頃一番馬車が着したるも牛肉來らず依て八時に着すへき二番馬車に積込んだであらうと思ひ之を待たんとするも來賓

の方にて空腹を訴ふるものありて、兎に角鶏卵のスープは出来て居るから之を差出して麥酒を傾くる間に肉が着するであらうといふので、食事を始めた、已にスープを啜り終れど、中々肉が来らぬ、更にスープのお替をせよとのことにて、二杯啜つたけれども、肉未だ来らず、更に今一杯といふことにて三杯まで重ねてスープを啜り、未だ終らざるに、八時に着すべし二番馬車が一時間後れて九時に着した、然れども何にかの間違にて、肉を持ち来らざる事が分り、當夕の西洋料理はスープ三杯と麥酒のみにて済ましたことがある、流動物のみの西洋料理は此時が空前絶後であつた、

第二百七十三話 鯨魚の饗應

長州大津郡川尻村は捕鯨の地にして、一村盡く鯨獵に従事して居るが、先年其氣節になりて一ヶ月餘り、更に鯨来らず、大に失望せる處へ、余

が巡回して來り、二日間演説を開會することに申合せ、愈々演説を始めんとする時、海岸にて法螺を吹き立て、來鯨を報するや、聽衆先を争うて海濱へ走り行き、暫時の後、一頭を捕獲し、其價參千五百圓にて賣買を了つた、村民一同の喜一方ならぬ、其翌日も亦捕鯨し、更に壹千五百圓を得、村中お祝をするほどのことであつた、其時の風説に井上博士の來遊の爲に鯨魚が來集したるのであると申し、意外の歡待を受け、二日共に演説もせず、鯨魚一色の調理を以て饗應されたことがある、余と鯨魚とは何等の關係なきも、妖怪博士化物先生などの異名から、世の所謂吉凶禍福の縁起に關係あるが如くに考へらるゝことが時々ある、世の中はおかしなものぢや

第十七類

人名地名

(十七) 人名地名

第二百七十四話 土地と人名

土地と人名とは自然に關係ありて、人名を見て其郷里の分ることがある例へば土佐人に馬の字の附きたる人名多く、長州人に槌又は介の字を附きたるもの多く、薩州人に熊又は彦多く、豊後竹田には夫又は雄又は男が多い、又薩州に一種特別なるは男女共にケサの名が多い、今朝とも書き、袈裟とも書くが、其最も多きは田衣ケサである、即ち畷の字をケサとよまず、多分造り字であらう、婦人には鶴ケサ、松ケサ、萬ケサ、千代ケサといふが如き名が澤山あるはめづらしい、

二百七十五話 珍奇の苗字

伊豫宇和島に九の一字姓があるが、之をイチジクとよませる、蓋し一字九の音より出でたるよみ方であらう、又樺太に四十八願と書きたる姓がある、之をヨイナラとよむは頗る奇である、其人は群馬縣より移住

したと申して居る、臺灣に明日と書きて、ヌクイとよませる、姓がある、福島縣より移住したものである、伊豆に月出と書きてヒクチとよむ姓がある、播州の眞宗寺に尺一といふ姓と、畢采といふ姓がある、尺一は寺の字が十一寸即ち一尺一寸なるより考へ出し、畢采は釋の字を分析して作つたのである、又石州大田町に面白といふ姓があるも、實に面白い、又諸方にあるが、東海林と書きてシヤウジとよむは無理のよみ方である、又上總東金町の酒屋にて富泉屋をヨシイヤとよむ奇怪である、

第二百七十六話 同姓同名

伊豆大島には同姓同名の者多く、爲に間違を起すの恐れあればとて、親の實名を冠して呼ぶ風がある、例へば勘八傳といへば勘八の子の傳の事、傳吉岩といへば傳吉の子の岩の事、オボナガとはオボの娘のナダのことである、斯くして區別して居るも面白い、

第二百七十七話 余が姓名の偶合

長野縣上高井郡須坂町近傍に井上村と名くる一村がある、余を聘して一會を開かんとを申込だから、余其招に應じて此に至れば、會場は圓了寺と名くる寺院である、村已に井上と呼ぶ、寺院又圓了と稱す、斯る場所にて井上圓了が演説するは、不思議の因縁といはねばならぬ、其後北海道に遊び、黒松内驛の開會に出演したるに、止宿所は有志家井上徳之助氏の宅にして、會場は旭圓了氏の寺であつた、是れ亦奇遇と申して宜い、

第二百七十八話 同名異人

世に同名異人が多いが、井上圓了の名は日本に唯一人と心得しに、先年京都に於て書翰の間違より、井上因了といへる別人あることを知つた、又東京にては同音の姓名本郷區内にありし爲に、間違を惹起せし事

があつて、其人の名は井上延陵にして、文字は違つて居る、又余と井上哲次郎氏とは其名異なれども、共に哲學を専攻せる故、時々混同せらるゝ事がある、或は父子兄弟の關係あるが如くに想像するものもある、或は二人其實一人にして、哲次郎は名圓了は號なりと考へて居るものもある、或は兩名を混じて井上圓次郎と書いた書狀を手にした事がある、或る人が井上圓了は兄で、井上哲次郎氏は弟だと考へて居たさうだ、其譯を聞くに、一方は次郎と云ふからは、弟に相違ないと思ふたといふことぢや、

第二百七十九話 アイヌの珍名

北海道アイヌには頗る珍名が多い、五升樽、壹升樽、密柑箱などの名前がある、我政府よりアイヌ固有の名は呼びにくいから、内地語の名に改めよと命ぜられた時に、内地人に命名をたのんださうだ、其時にひやか

し半分に勝手次第の名をつけてやつた、或る時アイヌに頼まれて馬の骨とつけてやつた處が、是れはあまりおかしいから改めてもらいたしと申す、依てそれから馬骨にした方がよからうといはれて、アイヌ喜んで歸つたさうだ、朝三暮四に類した話である。

第二百八十話 臺灣人の奇名

臺灣人は迷信が強い事に鬼を恐るゝことが甚しい、すべて病氣災難は鬼の祟りと信じて居る、因て子供に名を付けるにも、鬼のつかぬ様の意味の字を取つて命名することがはやる、其一例に馬鹿防房糞の如き名がある、此様な名を附けると鬼の方から嫌ふて近寄らぬと云ふ考である、又内地人が臺灣人を指してチャンコロと呼ぶと、彼はチャンコロに非ずして、日本コロだといふて答ふるも面白い、

第二百八十一話 矮人の異名

先年余が朝鮮客中に聞いたが同國にては身の低き人を異名して、只といふさうだ、其譯は口の下に直に足あるの義である、それより一段低きものを貝と申す、目の下に直ちに足あるの義ぢや、それより更に一段低きものを六と名く、頭の下に直ちに足あるの義であるとは、一種の謎だが、中々面白い異名と思ふ、

第二百八十二話 地名の讀方

地名に同名の爲に間違を生ずることが多いが、此誤りを避けん爲に自然に讀方を異にするに至つたのがある、例へば神戸の地名を攝津にてはカウベと云ひ、伊勢にてはカンベと云ひ、美濃にてはガウトと云ふが如き、東京附近にて甲州街道の新宿はシンジュクと呼び、水戸街道の新宿はアラジュクと呼ぶが如き、又市中の本郷區の田町をタマチと讀み、神田區の多町をタテウと讀むが如き、又東京の日本橋はニホンバシ

と稱し大阪のはニッポンバシと稱するが如き、又伊豆の熱海はアタミと唱へ、出羽のはアツミと唱ふるが如き、福島縣の福島はフクシマ、木曾地の福島はフクジマといひ、北海道の松前はマツマイ、伊豫の松前はアサキといひ、奥州の南部はナンブ、紀州にてはミナベといひ、又三州にて村名の豊川はトヨカワ、川名の豊川はトヨガツといひ、尾州の長島町はナガシマにして、美濃の長島町はオサシマとよみ、加州にては金澤をカネザワ、武州にてはカナザワとよび、播州にては赤穂をアカホ、信州伊那にてはアカホと唱ふるが如き、河内にては八尾をヤヲ、越中ではヤツヲといひ、越後では高田をタカタ、肥後ではカウタといふが如き、皆其類である、又川に就て出雪に簸の川があり、伯耆に日野川があるが、共にヒノガワとよむべきなれども、雲州にてはヒノカワといひ、伯州にてはヒノガワと呼ぶも、やはり其類である、

第二百八十三話 難讀の村名

余の聞込みたる村名中其讀み難きものを列擧すれば、左の通りである、

- 豊後日田郡日出山村をクワントウとよむ、
- 筑前宗像郡上八村をカウジヤウとよむ、
- 同筑紫郡日佐村をオサとよむ、
- 同嘉穂郡目尾村をシヤカノヲをよむ、
- 肥前佐賀郡飯盛村をイサガリとよむ、
- 日向東臼杵郡祝子村をホリとよむ、
- 出雲簸川郡十六島をウツブルイとよむ、
- 同八束郡出雲郷アタカイとよむ、
- 隱岐周吉郡津井をサイとよむ、

讃岐多度郡鹽生をハブとよむ、

大和吉野郡西川をニジツコとよむ、

上総君津郡二十五里をツイヘイジとよむ、

同不入斗(東京市外大森にもある)をイリヤマズとよむ、

下総木下風町近在に神々廻をシ、バとよむ、

越中の村名中に峠の宇をクラとよむ、

羽後院内嶺下の及位をノゾキとよむ、

信濃下伊那の神稻をクマシロとよむ、

其外全國を尋ねたらば斯る難讀の村名が多々あらうが、改名して貰いたいものだ、

第二百八十四話 勸學の村名

石州三瓶山麓の温泉場に志學と名くる處がある、其由來は明かなら

されども、中々結構の名である、余は旅館に一詩を留めて去つた、

三瓶山腹沸泉清、一浴初知志學名、洗去身塵與心拓、

何人不起讀書情

之と好一對の村名は信州西筑摩郡讀書村である、之をヨミカキ村とよむ、其名の起りはもと與川、三留野、柿園の三ヶ村を合して一村とする際一字づゝを結び付けたのであるさうだ、いづれも美名である、

第二百八十五話 面白き村名

能州鹿島郡に大呑村といふがある、又薩州伊位郡に大口村といふがある、随分牛飲馬食の行れて居る村のやうだが、其實反對である、又三州東加茂郡に酒呑村といふがあり、其村の校名を酒呑小學校とつけたるも、面白からぬとて村名も校名も鯢の海と改めたさうだか、是れも面白

第二百八十六話 村名の滑稽

大和國宇陀郡内には餅五つ、落とし、拾つと云へる村名がある、但し四ヶ村の名を結び付けたるものである、又隠岐にはウツカリ、スツカリ、ネムレバ、タ、クといふ村がある、是れも四ヶ村の名を合したものである、又信州佐久郡の町村を合すれば白ダ、杵ダ、望ツキダといふ名前が出来る、其外信州下伊那郡大平嶺の各間に、村落の小字に入道、牡丹餅、スカンと申す名があるも珍しい、又北海道後志國にピクニ村がある、其文字は比丘尼にあらずして美國なれども、最初は尼の住める村と思ふた、名を聞きて尼すむ里と思ひしに、來りて見れば美國なりけり、

第二百八十七話 合併の村名

近來合併村には種々の珍しき名がある、千葉縣長生郡に十一ヶ村を合して一ヶ村にした、此十一が互に睦くする様にとて、土陸村と名を定

めたさうだ、又甲州北巨摩郡に清哲と名くる村があるが、哲の字の村名に加はるは他に類例少なければ、其由來を尋ねしに、先年水上、青木、折江、樋口の四ヶ村を合して、一ヶ村とするときに、水上の水と青木の青と折江の折と樋口の口とを合して新たに組立てたる村名である、と聞えたが、此考案も面白い、

第二百八十八話 村名の矛盾

出雲八束郡にては玉造村と湯町村とを合して、湯玉村と定めてあるが、玉造村には天然の温泉があり、湯町村には、瑪瑙の物産がある、即ち玉造に湯ありて玉なく、湯町に玉ありて湯なきは奇である、之に似たる話は大坂に坂なくして、山梨に山があり、肥後の阿蘇に名高い坂がありながら、坂なし町と名をつけてある、武州の田無町にも田があり、臺灣の桃園街に桃が一株もない、又信州下伊那の大平村は山許りである、随分名

實不相應の町村はあるものだ、

第二百八十九話 東京人の矛盾

東京人は硯箱をアタリ箱と呼び、梨をアリノミと呼び、すべて縁起をやかましくいふ處なるが、神保町をピンボウ町といひ、富坂をトビ坂といふは、少々矛盾して居る様だ、三田に御化横町と呼ぶ處がある、是れは大場健次郎と名けたる人の住せし横町より轉し來つたといふことぢや、又青山の幽靈坂も或る寺の名より轉訛したと聞いて居る、

第二百九十話 霧多布の名稱

北海道東岸に霧多布と名くる地名がある、其名稱はアイヌ語に國字を當倣めたるに相違なきも、其邊一體に霧の最も多き處なれば、霧タツプリと解しても宜い、然るに余は別に三十一文字を以て其解を附會した、

霧多く昆布の多き土地なれば、霧多布とぞ名をつけにける、實際其地は昆布の澤山とれる場處である、

第二百九十一話 山の珍名

豊後日田郡内に一尺八寸と名くる山がある、其名己に奇なるが、之をミオヤマとよびに至つては頗る珍といはねばならぬ、又隱岐の島前に家督山とかいてアトヤマとよまするも奇名である、

第二百九十二話 樺太の凍榮府

樺太第一の都會をコルサコフといふ、是れ露名である、アイヌ語にては九春古丹といひ、其雅名を楠溪とつけてある、コルサコフに就ては未だ漢字を配したるものがない、依て余は之を凍榮府と譯した、樺太行舟中作左の如くてある、

小樽灣外駕長鯨、口吐煤煙向北行、雲際流紅知日沒、

波頭戴白覺風生、夜深樺太星光冷、月滿天鹽山影明、
一夢醒來朝霧暗、茫々何處凍築城、

此凍築城は余の製造したる文字ぢやが、其後政府にては露名を取らずして、大泊と改稱せられた、然し詩などに用ふる雅名としては、大泊町よりも凍築城の方が宜いかと思ふ、

第十八類 言語文字

第二百九十三話 各地方の方言の一致

長崎縣、新潟縣、和歌山縣等にて語尾にノ一シ又はノ一ンシを添ふる處がある、又九州と奥羽にては何處へ行くを何處サ行くと申す、奥州就中南部にて名詞の下にコをつけて話す、例へば馬の子の足の裏に金が付いて居るといふべきを、馬コの子コの足コの裏コに金コが付いて居

るといふの類ぢや、然るに伊豆大島にても名詞にコを附し、茶碗コ、姉コと申して居る、又人に呼びかけられたるときは受詞に、佐賀久留米、熊本、彦根にてナイといふて返事する、是れ皆東西數十里又は數百里を隔て、方言の一致を見るものにして、奇怪と言はねばならぬ、其他出雲人と奥羽人との發音の似てゐるのも妙である、

第二百九十四話 奥州及び天草の方言の一致

奥州にては出ると出來るとの相違がある、例へば月が出來た、團子が出たといふ類である、之と同じく肥後天草にても出ると出來るとの相違がある、即ち家の出來るを家の出るといひ、日の出るを日の出來るといふて居る、是れ偶然相合したるものならんも、東西五百里も隔て、互に一致する語のあるは不思議ではないか、

第二百九十五話 宮城縣の方言

(十八) 言語文字

東北地方はすべて發音が鼻にかゝり、シの音はすべてスとなる。故に字の上にかき分くることの出来ないものが多い。是に就きて種々の奇話があるが、其一例を申さば、宮城縣下の或町の湯屋にシリ御用心とかいて張付けたる紙がある。湯屋にて尻用心せよとは如何なる意味か了解し難い。餘り奇怪に思ふたから、後に人に尋ねたれば、スリ御用心の意なることが分り、大に笑ふたことがある。

第二百九十六話

岡山縣の方言

岡山縣は備前備中美作の三ヶ國より成るが、此三國おのずから方言の相違がある。即ち語尾に於て備前はカラ、備中はケリ、美作はケンといふ例はソ、ダカラといふは備前、ソ、ダケリと云ふは備中、ソ、ダケンといふは美作である。又備前の語にて他國に通ぜざる言語は、病氣を閉

口といふことぢや、御病氣なされましたかといふべきを、御閉口なされましたかといふ類である。

第二百九十七話

出雪の方言

出雲人はシとス、チとツ、ヒとフの音を言分けることが出来ぬ。又皆無をカイシキといひ、大層又は大變をズンドといひ、始終をコシリンといひ、摺小木をメグリ、摺鉢をカソツといひ、一休することをタバコスルといふ。之に就て奇談がある。中學校の生徒が修學旅行の時に一休せんとて、先生にタバコして宜うござりますかと尋ねたれば、大いに叱責を受けたさうだ。

第二百九十八話

隱岐の方言

隱岐にて放蕩のことを玉タレといふが、心靈の墮落を意味するに相違ない。澤山のことを天保といふ。隱岐の天保とは他國にも知れ渡る程

である。下流の人の母を指してメメといひ、上等の妻をゴレンザンといひ、自分の事をダラアといひ、同等のものをノシといひ、出来ぬことをガツタリ、疲勞したるをガメタ、寝ることをガメコム、ころぶことをクドレルといふの類、枚舉に遑なき程である。

第二百九十九話 福岡縣の方言

福岡市及び其近在にてはダをラと誤り、ドをロと誤ることが多い、又筑前にて人の話の受答に、同等に對してはハイといひ、上等に對してはヘイといふ、又筑前にて此處を指してココモトといふ、越後地方の方言に同じい、又筑前の方言は熊本に似て居る、然し三潞郡は違ふ所がある、例へば人に對して我方をオドンといひ、人の方をワガと呼ぶ、他人をワガと呼ぶ、他人をワガと呼ぶことは豊前にも行はれて居るが、豊前では上より下を呼ぶときに限ることになつて居る。

第三百話 佐賀縣の方言

佐賀縣の舊佐賀領にては兄をオバーサンといひ、叔母をオバサンといひ、祖母をババサンといふ、而して兄をオバーサンと呼ぶは、弟又は妹より談しかける時に限る、若し他人に向つて兄を指すときは、アンザイモンといふ、他國人が佐賀縣人同志相對して談話せる語中に、アンザイモンを度々繰り返したるを聞き、之れを人名なりと思ひ、佐賀縣にはアンザイモンといへる名がソんなに澤山あるかと尋ねたと申すこと、ちや、余が佐賀縣方言を集めたる一句がある、

ハイをナイ、兄をバーサン、アグラをばイタマグリとは佐賀の方言、又貴様といふべきをワンサンといふ、若し佐賀を離れて久留米領に入れば、兄をオヤカタ又はパンチャンと呼ぶも奇妙である、其外佐賀にて牡蠣を雪の衣といひ、鹽を潮の花といふは頗る雅である、同じ佐賀縣で

も唐津は發音が違つて居る、すべて唐津領ではサシスセンをチアチツ
チエチオと聞ゆる例へば見エテオルを見エテヨルといふの類である、
山口縣にも之にひとしき音調がある、

第三百一話 熊本の方言

熊本に入りて第一に耳に觸るゝ方言はクサイ、パツテンである、クサ
イとは京阪のサカイ又は東京のカラ、即ち故にの意であるが、時により
ては助語に使用して居る例へばヨカクサバイ、パツテンクサイといふ
の類である、パツテンは長崎でもいふがケレドモの意ぢや又センをシ
エン即ちアリマセンといふべきをアリマシエンといひ、甚だといふべ
きをイサギエーといひ、オ疲といふべきをオツケナリマシタといひ、氣
持のよいを身がンガヨイといふ、此の如き類は一々擧げ盡くすことは
出来ぬ、又一丁といふことをすべての事につけて云ふ風がある、一丁呑

まう、一丁歩カウー一丁休まうの類である、同じ熊本縣下でも葦北郡にて
はフとヒとの相違がある、笛を吹くをヒエをヒクといひ、三味線を引く
をヒクといふ、出雲や越後にてはヒとフとの相違がある、雲州では一ツ
二ツをフトツ、ヒタツと申して居る、

第三百二話 薩州の方言

薩州にては大鯪をテコといひ、大根をデコといふ、豆腐をオカベ急須
をチヨカ、あちらこちらをイツベコツベといふ、又鯛をテノイヲといふ
が、或る旅人が旅宿にありて手拭を買ひ來れと命じたれば、鯛を買つて
歸りし奇談がある、酢をアマンといひ、アマンタモシとは、酢を下さいの
意である、天氣のよき時の挨拶がヨカハダモチ、新年の祝詞がワカナリ
マシタ、人と別れる時にイマデゴアンス、又はアスデゴアンスといふの
類、一々擧げ盡くすことは出来ぬ、

第三百三話 伊豆七島の方言

伊豆大島方言には納戸をチャウダイ濁酒をゴンク、食器をヂャウゲ、猫をネホ、病氣をカナシイ、赤兒をボコ、汝をニシ、桶をヲヘコ、座敷をデ、來年をライセンといふ、カ行をハ行に訛まることが多い、又八丈島にては井戸をニド、泥をドル、水道をセイド、蚤をユミなど假名遣ひが澤山ある、又他國の人に全く通ぜぬ語は、忘れたことをヒツカスツタといひ、知らざることをシヨクナケといふの類である、其他子供を呼ぶに、太郎次郎三郎四郎をタロ、ジャウ、サボ、シヤウといひ、長女次女三女四女五女を呼ぶにニヨコ、ナカ、テコ、クス、アツバといふは、おかし北國では糞のことをアツバといふ、又然諾の語が下へ向つてはヤ、上へ向つてはヤ、同等の間ではオ、といふもおかしい、

第三百四話 氷柱及結跣の異名

氷柱は普通ツララと呼ぶも、石州ではナンジャウといひ、雲州ではサイといひ、隠岐ではセイといひ、肥後ではホダレといひ、北國ではカネコリといふの異同である、次に俗に足を組みて坐するをアグラカクといふが、越後ではアグシカクといひ、飛騨ではイツナカクといひ、雲州ではイツマを組むといひ、隠岐ではアブタをかくといひ、佐賀ではイタグラミといひ、熊本ではイタマグリ、又はヒウチガネ、又は一丁ナワナフといふ如く様々である、

第三百五話 ラ行とタ行との相違

鹿兒島と熊本とはラ行をタ行にて言ひ顯はすが常であつて、六をドク、論語をドンゴといふけれども、議論はキドンと云わずしてギロンといふは例外である、又タ行を却てラ行で言顯はすことがある、即ちワタクシをワラクシといひ、土瓶をロビン、承諾をシヨウラクといふの類で

ある、又此に九州にて多く原を讀みてバルといふ例へば島原をシマバルといふものが多いが、バルといふべきを却てハラと呼ぶ所がある、即ち豊前田川郡の香春をカハラと唱へて居るは奇である、

第三百六話 雲天萬里

佐賀方言の一にウンテンパンテンヒシチガツテルと云ふ語がある、天地雲泥の相違の義なれば、雲天萬里より轉したる語ならんとの説あれども、長崎のバンテンが英語のバントより轉じたりとの説にひとしい、又同縣三養基郡舊對州領にてはゴーホンパサラカといふ言葉があるが、大層多くあるの義である、夫故にゴーホンは豪放の音より來たと申して居る、

第三百七話 同音異實

東京にては盜賊のことをドロボウといひ、大阪にては放蕩家のこと

をドロボウと云ふ、佐賀にては人の兄をオバーサンといひ、羽前米澤にては人の妻をオバサマといひ、越後にては人の弟をオジといふ、東京にては買つてくるをカツテくると云ふ、尾州にては往くことをイカースといひ、越後にて歩くことをサハグといふの類は澤山ある、又尾州丹羽郡にて渡中人に會するときにオハヨイといふも奇である、

第三百八話 結尾の語と然諾の語

雅言にてナリと結ぶべき處を國々によりて異りたる語尾を用ひて居る、東國にてはダといひ、西國にてはチャといふ、唯東海道筋名古屋熱田の邊はデーヤといふ、鳴海邊まではダ、桑名よりチャといふ、美濃路にても東はダ西はチャといふことに聞いて居る、又人の間に對して答ふる然諾の語が國々多少の相違がある、ハイ、ヘイ、ネー、ナイ、ナ、ナン、ヤ、等である、加州にては一般にヤ、といひて答ふるが、其ヤ、を重ねるほ

ど相手を貴ぶことになる、故に旅館にありて手を拍つときは、ヤ、ヤ、ヤ、ヤ、の語重ねて起り、怡も撃剣道場に入りたるが如き心地する、奥羽はナ、ン方ぢや、

第十九類 童謡俗歌

第三百九話 御月様の童謡

童謡に「御月様イグツ」といふことがある、其年につきては全國一樣ならず、普通「十三七ツ」といふも、四國や山陰道にては「十三九ツ」といひ、大阪府下にては「十三一ツ」といふて居る、然るに余が沖繩縣に傳ふる所を聞くに、十三と十七である、月は十三日を以て美となし、女は十七歳を以て美となすの意ださうだ、内地の十三七ツは之より轉化したるものならんかと思ふ、

第三百十話 百姓流の歌

昔し水戸の烈公が上京せらるゝに際し、或る百姓が歌をよみて祝したといふ話を水戸で聞いたことがある、

筑波山つくばつてさへてつかいに、立つたら天をつんざくだんべ、又越前にて春嶽侯を詠じたる歌なりといふを聞いた、

春嶽が按摩のやうな名をつけて、上をもんたり下をもんたり、余は斯の如き歌を好むものである、

第三百十一話 方言詩歌

余が熊本巡遊中其方言を詩中に入れて作りたるものがある、

肥南何處試吟哦、數日山行氣削多、幸浴靈泉與嘉潔、一丁傾酒一丁歌、氣削は疲勞の意、與嘉潔は快甚の意、一丁は一回の意である、又歌を作つた、

イカギエー、ソーニヤー、オツケナリマシタ、イタマグリして飲めや
赤酒、

ソーニヤーとは大會の義である、又熊本人は、大事の處が明いて居たと
いふべきを「デヤージ」の處が「イヤイテツタ」といふ、すべて此様の發音が
多い、

第三百十二話 熊本の方言歌

熊本人が東京にありて郷里を思ひ出し、方言にてよみたる歌なりと
て同縣にて聞いた儘を掲げて置く、

オヤネー、ダツテ、デスよして、ジャロー、バツテンクサイこいしい、
即ち東京語をやめて、熊本語が慕はしいの意である、

第三百十三話 出雲の方言歌

何人か知らざれども、雲州の方言を集めて綴りたる俗歌がある、

ワスハ雲スノフラタノ生レ、ヅールニヅール三ヅール、フクズル、フ
ツバル、ステオイテ、今カラフォーマトハ、ヅ、ガナイ云々、
此中スをしに直し、フをヒを直し、ヅをジに直して見れば、大抵分る、余が
伊豫を去りて出雲に移る際に作つて七律がある、

誰使吾曹進教軍、如今大道亂紛々、已培德樹去伊豫、再轉法輪來出雲、
友愛情深人易近、志須音混語難分、実湖依舊明如鏡、照見三千年古文、
實に志須の音混じて聞取ることとはむつかしい、

第三百十四話 長崎の方言歌

「長崎の山の端に入る月はよか、コンゲン月エツトナカバン」との歌は、
長崎の方言を綴りたるものとして傳へてある、コンゲン以下は、此様な
る月は滅多にないよとの義である、世に長崎バツテンといひて、バツテ
ンの接讀詞は長崎に限るが如く傳ふるも、長崎よりも熊本の方が多く

パツテンを用ひて居る、

第三百十五話 薩摩方言の歌

「櫻花ナゼサシタカシランナイ、伊集院ノ箕作リガ見付ケタラ皮ヒツ
ツンクリラリウダイ」とは薩州の方言にて綴りたる歌である、其意は櫻
花ナゼ咲イタカシラナイギ、伊集院ノ箕作リガ見付ケタナラバ、皮ヲヒ
キサクデアラフの義であるさうだ、すべて薩州の語は此一例にて知ら
るゝ、如く容易に聞取ることが出来ぬ、

第三百十六話 日向の椎葉郷の方言歌

日向の椎葉郷は肥後は五家庄と山脈の向背を異にして、互に隣接せ
る僻地である、其言語他へ通せざるものが多い、今一例を擧ぐれば左の
通りである、

キノフミテケフミンシヤイガケヤイシカ、イツチゴミズバ死ノウ

ナシンジ、

其意は昨日見て今日さへも衰いが、一生見ざるに於ては死ぬてあらう
の意味であるとのことぢや、

第三百十七話 木曾の俗謡

余が木曾巡遊中俗謡の有無を尋ねたれば、最も世間に知り渡れるは
御嶽ぶしなりとて

木曾の御嶽夏ても寒い、裕やりたや足袋添へて

といへるを聞き、之を詩に譯してみた、

俗曲由來吾所愛、方歌却好知民態、木曾御嶽夏獨寒、欲贈裕衣添足袋、

第三百十八話 諏訪の糸取歌

信州諏訪は日本第一の製糸場のある處にして、幾千人の工女、他地方
より此に来る程である、就中平野村が其本場と申して宜い、其工女の糸

とり歌なりといふを聞いたが頗る面白い、

米は南京御菜はアラメ、なんて糸目が出るものか、
實際食事が悪くてはよ糸か出ないとのことぢや、

第三百十九話 飛驒の國歌

飛驒客中固有の歌をききたいと申したれば、

メデタ／＼の若松さまよ、枝も榮えて葉もしける、

此歌は飛驒の國歌ともいふべきものにして、何んの宴會がありても必ず第一番に此歌の出でざることはないと聞いたが、是れは飛驒に限つた歌ではなく、他國でも目出度ときに歌ふた唄だ、次に飛驒のナマリをよみたる歌なりといふを聞いた、

飛驒のナマリはオバサンアバヨムテンクテンにオリヤ、オツカナ
イ、

ムテンクテンとは甚だの義、オリヤとは己れのことである、又美濃路より飛驒に入る處に、中山七里といふ名所があるが、昔しは其間に人家がなかつたと申して居る此處の歌に

ういよつらいよ中山七里、川の鳴瀬を鹿の聲

とあるが、只今では人家があるのみならず、處々に茶店も旅店もあり、殊に山水の風致に至りては、木曾峽以上の公評である、左に余が入飛州途上作一首を掲ぐ、

曲々溪回路自迂、雲來林壑白將無、巖頭停枝望前岸、似對雪舟山水圖

第三百二十話 白川の俗謠

飛驒の白川郷は平家の遺族と傳へ來り、別天地の仙境であると同時に、方言俗謠亦一種特別である、先づ白川の祝唄といふを聞くに、

コ、ノヤカタはメデタイヤカタ、鶴が御門に巢をかける、

又田植唄を聞くに、

一夜御出と言ひたいけれど、未だカ、マの傍に寝る、
斯る類である、

第三百二十一話 伯州の俗謠

伯耆の國巡回中宇野村に一泊せしことがある、其村は海岸の一漁村に過ぎぬが、此村に就て世間一般に傳はれる俗謠あるを聞いて、面白く感じた、

宇野の沖から貝がらが招く、カ、よマ、たけ出にやならん、
歌中のマ、とは飯のことで、自然に天真爛漫の趣ありて實に妙だ

第三百二十二話 隱岐の俗謠

隱岐の俗謠にドツサリと名くるものがある、其一例を擧ぐれば、大仙オ山カラ隱岐ノ國見レバ、島ガ四島ニ大満寺の類である、大満寺とは全

島第一の高峰ぢや、余之を詩に寫して見た、

自大仙山望隱州、波間黙々四洲浮、四洲浮處見頭角、角是高峰満寺頭、
又狂歌を案出した、

はるばると隱岐の都に来て見れば、酒も肴も歌もドツサリ、
ドツサリの文字明かならず余之に突去又は毒去の漢字を當はめたが、
或人の説に隱岐の方言にてドウナリコウナリといふべきをドツサリ
クサリといふ故に、ドツサリは此語去り出でたるものにして、ドウナリ
コウナリ世の中を渡る樂天の意であらうと申した、此歌が到る處で名
物として御馳走に添て出て来る、隱岐を去りたる後も、其歌ばかりは耳
の底に残り居る様に感じ、之を詩に作つた、

探盡隱州風月清、穩晴波上一舟輕、歸來連夜眠難熟、耳底猶留突去聲、

第三百二十三話 大島の挨拶語及び方言歌

伊豆大島にては朝人に會するときにオキタナ一又はクツタナ一といひ、夜別れる時はウンネライといひ、正月正旦にはイワツタナ一といふべきまじだ、

内地コトバヂヤ、オヤスミナサイ、島ノアンコラハ、ウンネライ、アンコとは娘のことぢや、大島固有の俗語が澤山あるが、其中二三首だけ左に掲ぐる、

わたしや大島荒濱そだち、色の黒いは親ゆづり、
わたしや大島雨水そだち、胸にポーフラ絶えはせぬ、
大島の島といふ字は山邊に鳥だ、鳥が飛んでも山残る

第二十類 世態人情

第三百二十四話 日本人の氣質

日本人の氣風性質に就き、余會て謎を案出せしことがある、日本人の氣質とかけて何と解く、貧乏人の嫁入と解く、其の意は長持がない、

日本人とかけて何と解く、書翰の文章と解く、其意は候(早老)が多い、一は忍耐力の乏しきをいひ、一は早老の弊あるをいふたのだ、

第三百二十五話 犯罪と人心

何れの地方にても犯罪の統計によりて、其土地の人心の傾向が分る、余が島根縣にありて聞く所によるに、雲州には比較的詐欺竊盜罪が多く、石州には比較的歐打強盜犯が多い、此の一例によりて右二州の氣風性質の相違が分り、雲州は智的にして石州は武的である、次に長野縣にて聞くに、従前殺人犯の如きは、佐久郡に限る有様なりしが、近年は一變して佐久に少くして、以前最も犯罪の少なしと知られたる伊那方面に

却て多くなるに至つたとのことぢや、是れ一方は自ら誠め、一方は自ら安んじたるためであらう、故に油断は大敵である。

第三百二十六話

札幌の有志家

札幌の一有志家が余が寓居に來り、我家は一方に寺院があり、他方に藝妓家がある、宜く其意を含みて一句を認められんことを乞ふと申し、たから、即座に思ひ出たるまゝ、

我やどは戀と無常の間の驛、朝は鐘の音、夜は三味の音、（幻堂付句）

右の句を書して贈つた、之を見たる人は此句は浮世の眞面目を寫して居ると申し、出鱈目を吐きて人より好評を得たるは是れが始めてである。

第三百二十七話

秩父山中の實況

數十年前武州の名山たる三峰へ登山せんとて、秩父山中に入り、小茶

店に愁ふたことがある、山中米麥を産せず、只炭を燒きて之を運び出し、其代りに米を買ひ入るゝを以て渡世として居る、余が老婦に向ひ、米一俵の價何程と問ふに知らずと答へ、米一俵が炭何俵に當るを知るのみと申して居る實に太古の民と思ふた、全國中には斯る物貨貿易をして居る處は諸方にあらうけれども、東京より僅に十三四里離れたる處に、此様なる太古の民ありとは意外であつた、

第三百二十八話

車夫の天真爛漫

豊前國驛館村を發して宇佐町に至りし時に、車夫自ら有する所の扇子を取り出し、余に揮毫を乞ふた、其所望を尋れば、己れに惡き癖がある、即ち毎朝酒を呑むこと、時々妻と喧嘩することの二ツである、依て朝酒のひなカ、と喧嘩するなと認められたしと答へた、天真爛漫の車夫と申して宜い、

第三百二十九話 漁夫の所望

余曾て南海を巡遊して、紀州の海濱に至りしに、一村擧げて漁民である、一漁夫紙片を携へ來りて申すには、此紙に一語を書せよ、表装して永く一家の寶物となさんと、余問ふに如何なる語を書すべき乎を以てすれば、漁夫曰く別に望む所はないが、唯漁獵の澤山あるやうの文句を書していたゞきたいと、余其の文字を思出さず、一夕工夫を凝して漸く一旬を得、漁願成就、漁來如山と書して之を與へしに、漁夫大に喜び、多謝して去つた、其後船問屋の來りて一語を授けられんことを乞ふたから、余亦一考して、満船載福蹄、及び神佛護船運の二句を書して與へたが、是れ亦大に満足の體であつた、

第三百三十話 大は小に若かず

大は小を兼ねるといふも、杓子は耳かきの用を爲さず、長持は枕の用

をなさざるが如く、世間には大の小に若かざることが多い、其一例に奈良の大佛を見よ、淺草の觀音は身長僅かに一寸八分なるに、人の信仰歸依すること、府下第一である、之に反して奈良の大佛は身長五丈三尺にして、淺草觀音より大なること三百倍であるのに、之に歸依する信徒講中至て少ない、大佛參詣として其地に到るものに、崇信の意を以て拜禮するのではなく、一種の見世物的觀念を以て仰視するのみだ、故に大佛保護の任に當る東大寺は、大佛では飯が喰へぬと嘆じて居る、さればすべての物は大小に程度あるものと心得ねばならぬ、

第三百三十一話 篤志と不篤志

薩州枕崎にては余の演説を聞かん爲に東京相撲の興行を一日見合せた、又北海道岩内にては余の爲に芝居を三日間中止したことがある、之に反して越中射水郡某村にては演説よりは相撲の方が面白いとて、

余の演説を謝絶して相撲を興行した處がある、世間には何事にも篤志と不篤志とあるものだ、孔子様をして之を聞かしめたら、必ず我未だ演説を好むこと相撲を好むが如きものを見ずといふて歎息せらるゝであらう、

第三百三十二話 吝嗇家

余が群馬縣客居中に聞いたが、某村の吝嗇家が數十萬の大金を有し乍ら粗衣粗食、毫も博愛の心なく、慈善の舉なく、唯高利を貪りて己れの腹を肥さん事をのみ是れ務めとして居る、而して兒童の教育の如きは全く放任して、更に顧みざる有様である、近隣の者忠告して、粗衣粗食は敢て不可なるにあらず、慈善の舉なきも猶ほ恕すべしであるが、兒童の教育を棄て、問はざるに於ては、一家の財産を如何して興へんか、宜しく兒童教育に意を注ぎ、君の死後兒童をして永く其遺産を守らしむる

やうに訓育せよと申せば、當人笑て余は唯財産を増殖する一事を以て無上の樂とするものである、其遺産の如きは己れが既に味ひ了りたる糟粕に比すべきものなれば、子孫の之を守るも守らざるも余が關する所にあらずと答へて平氣で居る、余此事を聞き、吝嗇も此に至れば一種の豪傑であらうと申したことがある、

第三百三十三話 天保錢の出世

世間にて人並の顔をして役に立たぬものを呼て天保錢のやうだといふが、天保錢は表に當百とありながら、八十文にさへ通用せぬ故なれども、今日にては天保錢一枚の價は五錢乃至十錢に上つて居るは驚くべきである、自今役に立たぬものに天保の異名を廢せなければなるま

第三百三十四話 人の防波堤

余が先年越後親知らずを経て越中に入り、泊町に泊りしことがある、其時聞くに維新前加州侯東上の時には、町内より壯丁三百人を撰抜して、親知らずの海中に屏立せしめ、之を防波堤として其内側を通行せられたりとのことぢや、人を以て防波堤に代ふるは世界萬國に類なきことであらう、然し此一例によりて其當時の大名の勢を察することが出来る。

第三百三十五話

日露戦役の死者

余が薩州加治木にありて聞く所によれば、國分及び加治木などにては、明治十年。西郷戦争に十人中七人は戦死した、されば今度の日露戦争には十人中無事にて凱旋するものは一人位のものならんと覺悟し居たりしに、死者は一割に満たざるには皆意外に感じ、少し物足らぬ様に思ふと申して居た、一體薩州は軍人的であつて、戦争に最も適して居

る國民なることは此一例に考へても分る。

第三百三十六話

士族と平民

鹿兒島縣にては士族と平民との懸隔甚しく、役員は勿論、教員も士族に限るが如き勢である、平民は呼びすてにし、士族は某ドンとドンを添へねばならぬ、又士族は口ヒゲを有するも、平民はヒゲを延さず、故に車夫にして口ヒゲあるは必ず士族にして、人皆何ドンと呼び、尊稱を用ひて居る、平民が士族の大工を雇ふときは、其道具を荷ひて送り迎へをなすとのことぢや、殊に奇なるは士族は皆紺足袋を用ひ、白足袋は平民の所有なりとて排斥すると聞いて居る、偶々平民にして小學教員に奉職するものあらば、忽ち排斥運動が起るさうだ、近年追々其懸隔が減じ來るも、猶ほ他國に比すると大なる相違がある。

第三百三十七話

生命よりも金錢

支那人を載せたる汽船が沈没する場合には、救助せらるゝ人少なくして、大抵皆溺死するさうだ其理由を聞けば、支那人は生命よりも金銭を貴ぶ爲に船の沈まんとするや、携帶せる銀貨を悉く腰にくゝり付け、殊更に身に重量を添へ沈没するに適する様に仕向けるからであるとの説ぢや現に臺灣にて本島人と唱ふるものは、元來皆支那人種なれば、何にも彼も金銭本意であるさうだ、之を濟度するは釋迦の説法でも基督の力でも困難であらうと申して居る、

第三百三十八話 臺灣人の利己主義

臺灣人は隣家に夜中盗難にかゝりつゝあることを知りても、出てい助けやうともせぬ、知らぬふりして寝て居り村内に火災にかゝるものありても、ボンヤリして見て居る計りて、水を汲みて火を消すの手傳もせぬ、若し手傳せよと命ぜらるれば、金何程出すかと直ぐに金銭の談判

となるさうだ、人情や義理の爲に動くにあらずして、只金銭利益の爲に動くのみどいはねばならぬ、此事を聞きて古へ孟子が何ぞ必ず利を云はん亦仁義あるのみと諄々と説れたる當時の事情が分る、

第三百三十九話 三寒四温

朝鮮の氣候は一般に三寒四温と申して居る、即ち寒きこと三日間續けば、其後四日間の温暖を見るとの意である、余思ふに是れ獨り氣候のみにあらず、人世の事皆此の如く三夏四喜、三苦四樂、三禍四福、三逆四順ならざるはなからう、故に余は人間萬事朝鮮氣候といひたいと思ふ、

第三百四十話 朝鮮の内情

従來の朝鮮にては悪政の結果、人民の勤儉力も貯蓄心も天才も人才も壓殺したりしことは、事々物々に就て知らるる、偶々技術に長じたるものありても、世に知られないやうにせなければならぬ、若し知られた

ならば御上より無暗に仕事を命じ何等の報酬も與へず骨折り損の草臥儲けに了らしむるさうだ之と同じく勤儉貯蓄に就ても彼家に金ありと知られたならば直ぐに御上より取り上げらるゝから寧ろ金をためぬ方がよいといふことになる余が朝鮮客居中一日寺院を尋ねて見た偶々一紳士らしきものが祈願をして歸るのに出會したから案内の者に何んの目的で祈願に來たのであらうかと聞けば役人になりたいといふ祈願か或は金を儲けたるに御上より取り上げられぬやうにと祈願をかけたに來たのであらうと申した自ら働いて得た金を取り上げられぬやうに願をかけるとはめづらしき話で朝鮮に其事ありとの一例を聞いて國內の實情が分ると思ふ

第二十一類

修養訓誡

第三百四十一話

道徳上の模範村

余が會て山形縣酒田港に滞在せしとき一夕將に燈を點せんとする頃四五十人の農夫蓑笠にて余が旅宿を尋ね來り恰も百姓一揆の如き有様なれば取次の者大に恐れ如何なる椿事の起らんも計り難ければ面會の拒絶を申渡しては如何と云に余は拒絶に及ばず此席へ案内すべしといひて面會せしに皆田夫野人である然るに各名刺の代りなりとて大道社會員章を出して見せた其來訪の旨趣を聞けば酒田を距ること約五里の山間の小村落のものにして人家僅かに百戸餘りなるも皆大道社員である其村の小學校の前校長が大道社員なれば村民を勸めて一戸を滿らす其社員とならしめた然るに余が大道社の顧問にして酒田に來遊ありといふを聞き村内のもの申合せ晝食を終るや直に出發して唯今此に着せしのである其用事は只御機嫌伺をなすのみ

なれば、幸に面會を得たから是より歸村すべしといふ時に日己に暮る、一泊しては如何と問ひたれば、農繁の時季なれば、今夕徹夜しても歸り、明日の家業に従事すべしといひ、丁寧に禮をなして去つた、其質朴にして純良なるに深く感動したことがある、是れ道徳上の模範村としても宜い、今其村名を失念せるは遺憾である、

第三百四十二話 今日今日の主義

因州若櫻町に一泊せし時一人ありて私は今日は今日、明日は明日といふ主義を取るものであるから、之に因める語を記さしたと頼まれた、依て即時に

今日は今日、昨日は昨日、明日は明日、其日其日を大切にせよ、の歌を書して興へたれば、其人大に善んで歸つた、實に人間は其日其日が大事である、若し過ぎたるものは追ひ難く、來るものは測り難しと知

らば、其現在を大事に思ふて慎むがよい、

第三百四十三話 不得要領

千葉縣東金町にて書齋の額面に「不得要領」の四字を記せんことを望まれた、斯る文字を額面に掛る人の心底こそ不得要領なりと思ひ、其理由を尋ねたれば、年來世人の言ふ所行ふ所、一として己れの意に通ぜず、不平に堪へず、爲に平素煩悶に苦みしが、或時友人の忠告に君は世間を以て要領を得たるものと思ふ故に、自ら招きて苦悶するのである、然るに世間は眞に不得要領のものである、人間萬事不得要領と思ふて居るがよいといはれて自ら大に悟り、其後は不平も煩悶も起らぬ様になつた、依て此語を書齋に掲げて慰安するつもりであるとの答であつた、廣き世間には奇なる慰安法もあるものぢや、

第三百四十四話 自強不息

山間の村落にて水車の代りに一本木の一端をくほめて、之に水のたまるやうにし、他端に杵をつけて米のつけるやうにした簡單なる米搗器械がある、之を出雲にては僧都といふと聞きて、山里に僧都はだか米をつくとよんだことがある、之を九州にてはバツタン車と申す、飛驒ではカラウスといひ、奥州ではパンカラと呼ぶ、之を見て居るに一度米をつくに中々長き時間を要するやうなれども、一晝夜に二斗以上はつき上ぐることも容易くあるとのことぢや、此事を思ふても人は自強息まざるやうにせねばならぬ。

第三百四十五話 江州の儉約

先年近江巡回中に聞いたが、江州は勤儉の風に富めるを以て全國に知られて居る、先づ江州足袋は其形大なるを用ひ、十文にても他の十文より一さわ大くある、二三回洗濯して漸く足に適する様に仕立たるも

のだとの事ぢや、又家屋は窓が少なく、光線が不充分で、陰氣の風がある、此く陰氣にするのも、やはり儉約の爲と申して居る、除り陽氣にする、自然奢りの傾向を生ずるやうになると申して居る、其國の第一等に位する財産家で、衣服は木綿を限りとし、朝に粥をすゝり、古傘の破れたるあれば、紙を拵へて物をつゝ、む用に備へ、竹骨は削りて串にこしらへ、柄は保存して竹の帚の柄にする等、すべて廢物利用に注意してあると聞いたが、此位にすれば何人も金のたまらぬ筈はない。

第三百四十六話 人は活動せよ

余は平素學生を誡めて、人は十六町乃至三十二町あるを要すと申して居る、手も七丁口も八丁なれば、合計十六丁である、然し之に目と足との八丁を加ふれば、三十二町となる、兎に角余は淺學非才であるけれども、健康のつゞく限りは働きたいとの精神である、此精神をよみたる歌

は左の一首ぢや、

生きて居る間にウンと働いて、死んでユツクリ休め世の人、

一休は、門松は冥土の旅の一里塚といふたが、余は門松は出世の旅の一里塚と改めた、又働くに就ては時間の貴重なることを忘れてはならぬと思ひ時々刻々新陳代謝前去後來、瞬息も留まらざることをよんで見た、

イマといふ今の今なる時はなし、マの時來ればイの時去る、

第三百四十七話 今樂不忘昔苦

少時艱苦を嗜めたるもの長して安逸を得るに至れば、舊苦を忘れて榮華に耽るものが多い、因て余は之を戒めん爲に、今樂不忘昔苦の語を作りて成功者に與へたことがある、然るに余の門下生の一人たる日高某氏は、先年東京留學中學資を補充せん爲に毎夜車夫となりて辻車を

曳いたことがある、成業の今日尙ほ其舊苦を忘れざらん爲に、人力の鑑札を筐に入れて座敷の床の上に恰も秘佛か守り本尊の如くに奉安して置くといふを聞き、是れ即ち今樂不忘昔苦ものと思ふた、

第三百四十八話 公德の缺乏

我國民に公德なしとは近來の一大問題なるが、都鄙共に多數の會合する場合には下足などの紛失すること多きは、國民に公德なき爲である、寒村僻郷と稱せらるゝ地方は、夜中戸を鎖さずして眠り得るかといふに、比較的戸締りを嚴重にする處が多い、紀州熊野地方の如き、伊豆大島の如き、其一例である、大島は毎戸納戸を設けて之に錠を下し置く、越後國松山温泉にて、其持主より聞く所に依れば、旅館の蒲團を失ふこと毎年數回に及ぶと申して居る、日向の高千穂の如き、非常の深山幽谷の間と申してよいが、宮崎縣にて聞くに、縣下中一番の人氣の悪い方だと聞

いて意外に感じた、然し平均すれば山間僻地は人情淳朴の方である、其證據は今日の所謂模範村は山間僻地に多いのを見て知れる、

第三百四十九話 伊藤家訓誠の一節

余が播州巡遊中富豪伊藤長次郎氏の宅に宿せしに、先代の家訓五十條を示された、いづれも處世の要訓である、其中に左の一節は頗る珍らしく感じたれば此に抄録して置く、

寺は随分中よくせよ、敬せよ、布施は我身證相應に上げよ、輕きは經を直さるの罪なり、僧も又布施だけには讀經せずば、經を盗む罪なり、自己に罪の心得あるべし、

第三百五十話 森田徳太郎氏

尾州丹羽郡東野村に森田徳太郎と名くる人がある、余の最も懇意したるものなれども、不幸にして已に不歸の客となつた、其人の來歴は他

には知られてあるまいが、實に感心の事が多い、其一例を擧ぐれば、同氏が十五歳の時に父に別れ、其遺産として後に残れる金が僅かに五六圓であつた、此些少の金を資本として、何をやらうかと工夫を凝らし、染物屋を始めた、其時に織物一段染めて賣出すと平均十錢づゝの純益がある、此純益を己れ一人の所有にするは、餘り慾張りたる譯ぢや畢竟斯る利益を得るのも、世の中の多くの人々の御庇である、されば此純益の半分は世の中へ分けてやるべき道理であると考へ、其分ける方法に就て色々考へた結果、五錢だけ念を入れて染めるがよいと思付、其通りに實行したれば、忽ち世の信用を得、同じ染物ならば森田で染めたのを買ふがよいと、買手が競争して注文する様になり、十五六年の間に、數萬の財産を作るに至つた、これは所謂公德商法といふものであらう、

第三百五十一話 比叡山と高野山

余滋賀縣巡遊中、一日比叡山に登りしが、一人の參詣者を見ない、後に紀州高野山に至りしが、毎日登山の人群を成し年中絶ゆることなしと聞いた、叡山は其地京都に近く、野山は遠し僻陬にあり、而して人の參集の斯の如く異なるは何ぞや、是れ一大疑問である、要するに其山を開きたる祖師の遺徳の民間に及ぶと及ばざるとによりて起りたるに相違ない、叡山は傳教大師の開く所、野山は弘法大師の開く所にして、此兩大師は前後殆ど時を同うして世にあり、且つ共に非凡の傑僧なりしも、傳教大師は高く君側に侍して、民間に下らず、弘法大師は天下を周遊して、専ら下民の教化に盡力せられた故に傳教の徳は世に知られず、弘法の恩は人之を誥して居る今余の如きはもとより其才學といひ性行といひ、此兩師の百分の一にも及ばざるものなれども、願ふ所は傳教よりも弘法を學ばんと志望を起したことがある、近來全國行脚を仕事とし

て居るのも其志望の實行に外ならぬ、

第三百五十二話

大石と逆流

信州は山國にして溪谷の間激流が多い、余此に遊びて大石の溪流の中央に屹立するを見たことがある、因て案内者を顧みて、如何なる激流も此大石を動かすことは出来まいと尋ねたるに、其者が申すに、此大石は過般の大水に數回動きて上流に溯りましたと、余怪みて其故を問へば、案内者が申すには、小石は大水毎に下流に降り、大石は上流に溯るものである、而して其逆行する所以は激流の大石に觸るときは、其石の前面にある土を洗ひ去り、自然に水底に穴を穿ち、石は己れの重量にて自然に上流に向ひ轉進するやうになると、余之を聞き大に感じ、是れ獨り大石のみ然るにあらず、世の所謂豪傑にして、心に重量あるものは、よく逆流に向て溯ることが出来る、因て格言一句を作つた、

大石能溯逆流、大人能溯逆運、

第三百五十三話 一女子の成功

余曾て九州を巡遊して小倉に至りしが、小倉は蓮門教本部の所在地である、其教祖島村ミツは長州豊浦郡貧家の女子にして、維新前より小倉藩士某の家に使ひて下婢となり元來教育なく、文字なきものなるも、明治四年より自ら天啓を得たりと稱し蓮門教を開設し、爾年二十年を出でずして、数百万の信徒を得、數十萬の資産を積むに至れりといふを聞き、其教義は世の所謂淫祀の類にして、愚民の迷信を買ふに過ぎずと雖も、微賤愚昧の一女子にして、猶ほ能く斯る成功を見るは、實に驚くべき一事と思ひ、女子既に此の如し、况んや堂々たる男子をやと感じ、大に意志を強くせしことがあつた、天理教も同じく一婦人の力によりて、偉大なる勢力を有するに至れるは驚くべきである、一時は此兩教互角の

勢でありしが、如何なる原因か蓮門教は漸々衰退し、天理教は大に發展するに至つた、

第三百五十四話 余の禁酒禁煙

余は明治二十年哲學館を創立して以來、禁酒禁煙の廣告をなしたが、二十七年夏鎌倉に客居中、日清戦争が起つた、平壤の開戦は國民一般に勝敗如何を掛念して止まざりしが、愈々大勝の飛報に接するや、上下擧げて拊舞雀躍せざるものはなかつた、余も大に之を祝せんと欲せしも、其趣向に苦み、漸く一案を考出し、十年間の禁酒を破りて祝杯を傾けることに致した故に之を名けて平壤紀念の酒と定めた時に人あり禁煙は何れの時に解く乎と尋問したから、余之に答ふるに、他日露國と戦ふて勝利を得たる時を待たんといひたりしが、果して明治三十七年日露開戦に當り、鴨綠江の大勝を聞き、大に煙草を喫して祝意を表した、是れ鴨

緑江紀念の煙草である、

第三百五十五話

艱難人を玉にす

播州明石海峡の魚類は、其味美なるを以て世に知られて居るが、明石の友人の話に、是れ潮流の強き間に身を苦しむる故であるさうだ、讃州小豆島の薯も其味よしといふが、是れも地質細石多く、其間に苦めらるゝによるとのことぢや、然れば人も亦然り、艱難によりて練磨せらるゝにあらざれば、人物とはなり難い、諺に艱難人を玉にすとは、此事である、

第三百五十六話

災難を見て自ら戒めよ

能登鳳至郡の海上数十里離れたる處に一孤島がある、全島悉く漁を業として居る、余が昔年能州輪島に滞留中に聞きたるが、其少し以前、此島に於て漁期の最中老衰したるものと幼兒とを家に残し、全島擧げて數里の外に漁業に出てしに、一民家過ちて火を失し、全島一戸をも残さ

ず、悉く類焼してしまつた、大漁の後、家に歸りて大に祝せんと思ひ、喜び勇みて歸り來れば、各戸一物を出さずして全焼せしを見たさうだ、其時の落膽如何計りかは想像の外であらう、廣き世間には随分不時の災難に遇ひ、極端の不幸に陥るものがあるから、それを思ひ合せて己れの仕合を喜ばねばならぬ、

第三百五十七話

猫にも猶ほ情あり

明治四十三年秋は關東にも水害があつたが、美濃の東部には大水害ありて、二三時の間に一部落の民家を滅した處がある、偶々余は其近郷を巡回して居たから、見舞に立寄て見たが、實に悲惨のものであつた、其時に實況を賦した詩がある、其罹災地は七宗山と名くる山の麓であつた、

七宗山下步堪移、 災後荒涼風物悲、 訪到人家流失跡、

慇懃老婦説當時



登別温泉地獄溪

此地方に家族九人悉く溺死し、只残りしものは猫一疋のみの家があつた、其猫が茫然として落膽の情をあらはし、如何に食事を與へても毫も食せず、自ら殉死を祈り居るものゝ如くてあるといふを聞いたが、猫にも人情あるものと見ぬる、

第三百五十八話 娑婆の地獄

箱根に大地獄小地獄あれども、地獄を想するに足らぬ、越中立山に地獄あれど、余未だ實視せぬ、而して余が今日までに實視せる中では、足尾銅山にて銅鑛の有様を見たる時は、北海道登別温泉にて沸騰の實況を見たる時こそ、地獄は斯の如きものならんとの想像を喚び起した、田舎の老婆に之を見せて、説法して聞かせたいと思ふ、

第三百五十九話 修養的詩

詩は心的美術にして、よく人の心を動かす力のあるものだ、故に歴史上忠君愛國に關係ある舊跡を尋ねる毎に、成るべく所感を詩中に含めるやうにして居る、此に其二三を擧ぐれば、筑前太宰府に到りし時の作が三首ある、

身似浮雲忙去來、 鎮西爲客此三回、 馬溪風月非吾意、

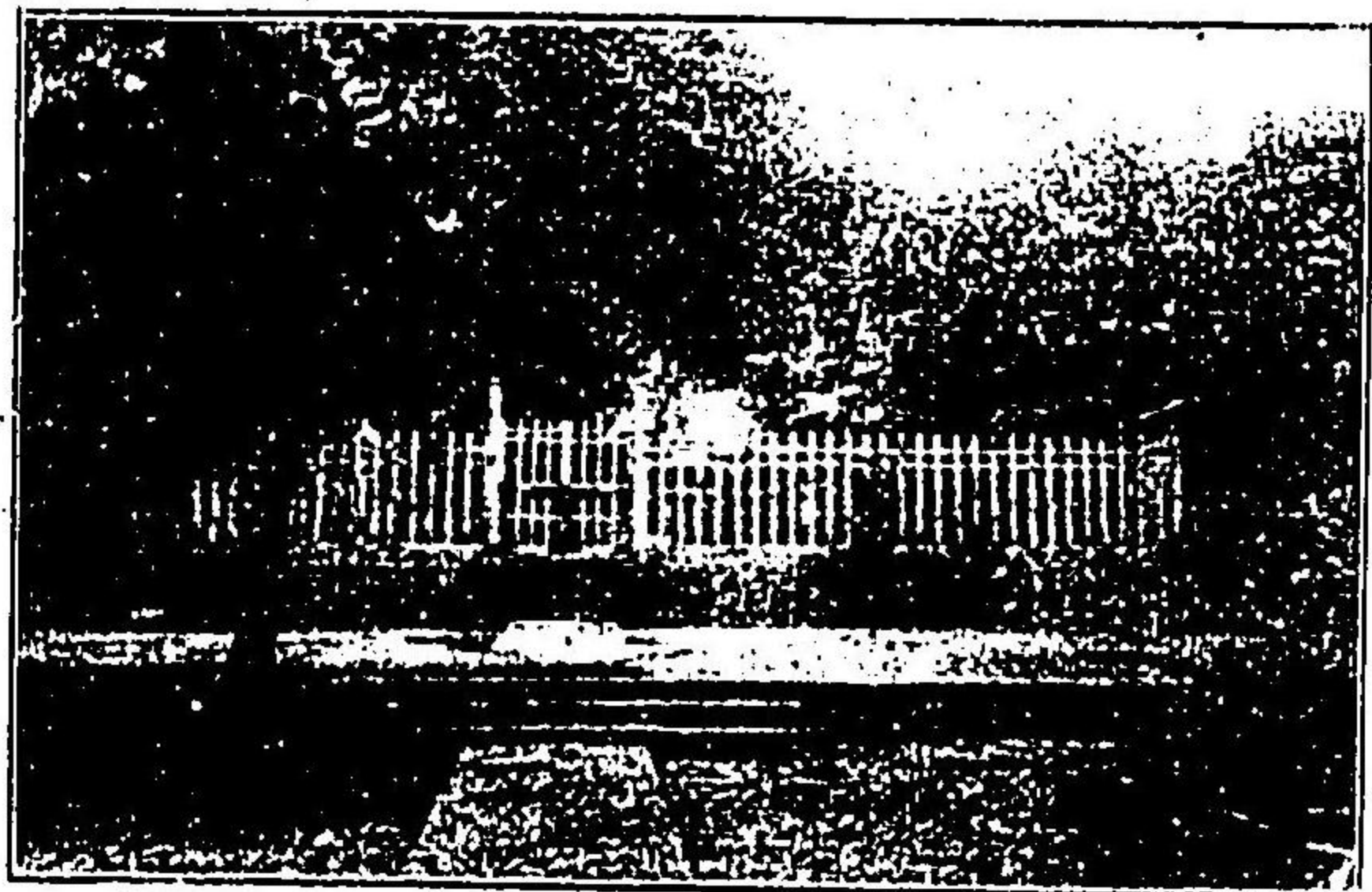
欲訪菅公遺愛梅、

菅廟門前寄客身、 雨窓唯與社燈親、 滴聲誘起梅花夢、

結得一千年古春、

菅聖社頭月破雲、 清輝照處絕塵氛、 滿庭梅樹千年影、

寫出經忠緯孝文



隱岐後鳥羽院御陵跡

大和吉野所感の詩は、

延元陵下歩新晴、俯仰何堪懷古情、

山寺無花春寂々、綠陰堆裏聽殘鶯、

笠置山所感の詩は、

探勝來投笠置城、風光何事使人愁、

元弘遺恨千年淚、染出滿山紅葉秋、

隱岐後鳥羽上皇の御陵を參拜したる詩は、

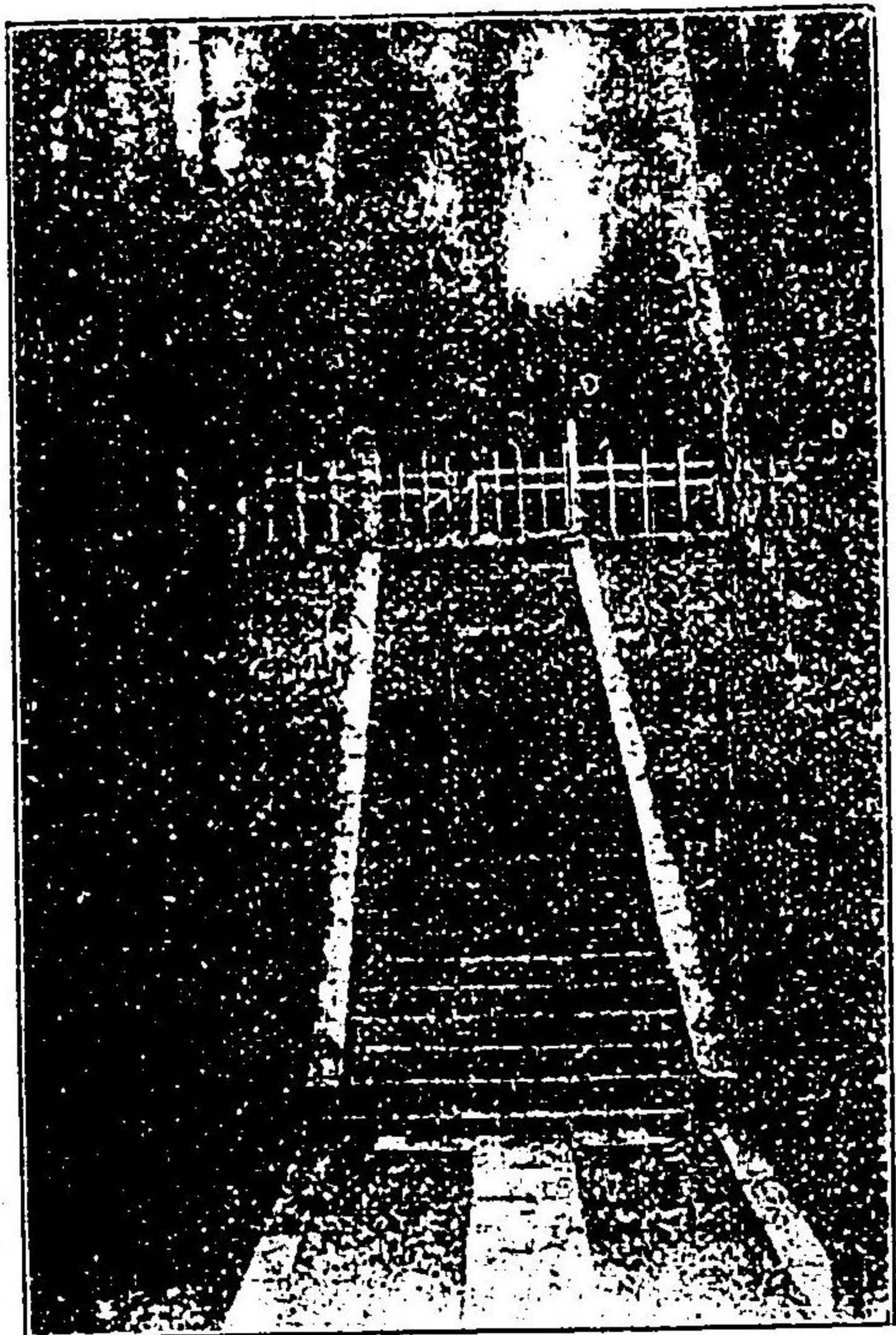
古陵寂々鎮林巒、一拜々終千感生、

絶海潮風孤島雨、當年天子御魂寒、

同じく後醍醐天皇行宮所に於ける所感は、

黒木灣頭丘一堆、皇居跡古樹將摧、想來遷幸當時事、

松籟波光亦淚煤、



隱岐黒木御陵跡

肥後菊池神社にて賦する所は、

家門累代唱勤王、

欲訪遺蹤登社岡、

滿目美田桑麥色、

英靈千載有餘光、

伯耆名和神社にて作

りたるものは、

一道櫻林自作窠、

拜神人踏落花過、何知孤憤當年淚、滴々結成焦粟多、
又伊豫脇屋義助祠畔にて詠したるものは、

山寺春深花落時、尋來脇屋義公祠、南朝千古忠魂色、

残在皇松百尺枝、

の類は、皆自他修養の一助となさんとの微意である、

第二十二類 吟詠語句

第三百六十話 笑門福來

某地方にて一人あり、來り乞て曰く、我家近來不幸にして病患續きて起り、一門鬱憂に沈んで居るから、願くば愁眉を開くが如き語を授かりたいと、余左の詩歌を書して



(基の助義屋脇)松皇天と殿客寺分國豫伊

與へた、

泣面蜂時螿、笑門福自開、欲求多幸道、兩頰寄波來、

福は笑ふ主人の門に住む、飽くまで笑へ頰の落つるまで

其外に笑門福來、泣窓鬼親の語も書いてやつた、

第三百六十一話 余が和歌俳句

余は全く和歌俳句を知らぬ、不知歌齋道人にして、又不知句齋道人である、然るに時々人に責められて餘儀なく十七文字、或は三十一文字を竝べてみることもある、此に其二三首を連ねてみた、

辛抱の棒で怠惰の鬼を打て、

ヘーゲルの哲學こそはくさからう、

貧乏は稼ぐ足には追いつかぬ、いそぎてあるけ福の宿まで、

さかづきは人の好みにまかすべし、酒を呑ふとお茶をのまふと、

忠孝の道は鳥にも知られけり、雀は忠々、鴉は孝々、

第三百六十二話 余が得意の詩

余未だ詩味を了せず、隨て詩人の詩を解せず、すべて自己流の俗調を以て得意として居る、其一例を示さば、皆左の類である、

夜來鼻汁幾回垂、恰是風邪欲起時、購得正宗代醫藥、一傾百病忽平治、

團子由來人所嘉、皆云其味美於花、墨堤今日看堪笑、千客爭登言問家、

虛榮懸處衆情鍾、私利來時萬客從、浮薄如斯君莫怪、世間多是拜金宗、

來者相迎去不追、守誠只與此心期、人生褒貶輕如屁、聲大臭高皆一時、

麥酒寢前傾一瓶、醉來半夜臥高廳、夢尋使所排扉去、

將放尿時眠始醒、

第三百六十三話 辭世の詩

余は南船北馬東去西來の身なれば、何時山に斃るゝか？海に果てるか？知れぬから、豫め辭世の二首を作つてある、

世事由來幾變更、老餘只喜會昇平、非僧非俗心常穩、無位無官身自輕、淡以相親何擇友、斃而後已不期成、吾生幸得全天壽、笑向黃泉深處行、身似浮萍去就輕、茫々世海任風行、一男二女兒皆健、四聖六賢堂漸成、千載榮譽尋古道、半生耻辱賣虛名、噫吾逝矣復何惑、彼岸高邊有喚聲、

第三百六十四話 西郷墓前作

鹿兒島城客中一日、淨光明臺に登り、西郷南洲翁の墓前に詣し、一吟を

試みた、其時三月上旬であつた、

探勝二月入麗陽、城外已見春色央、好折一枝殘梅去、
淨光明臺吊西鄉、翁去三十一星霜、香花不絕骨自芳、
回想城山自刃日、何人不起感無量、皇軍海外驅虎狼、
功成國威震八荒、當年遺志今始徹、須向墓前舉祝觴、

第三百六十五話 廣瀬中佐

豊後竹田町は廣瀬中佐の出身地にして、余の此に到るの日、正しく銅像の除幕式があつた、其實況も詩を以て寫して置いた、

軍神像成舉盛儀、是日晴風翻國旗、人埋林壑滿山黑、
奏樂聲中幕正披、眉目如活使人想、悠悠含笑上船時、
七生報國君自誓、誰疑千載護皇基、

第三百六十六話 凝然大徳

哲學堂内に奉崇せる三學中の一人たる凝然大徳は、伊豫の出産なりしも、豫州人之を知らぬ、因て余が大洲客中に賦したる長篇一首中に其事を述べた、

海南風月明且美、凝然大徳生於茲、該覽博識誰能敵、
內典外書無不窺、著作一千二百卷、文章雅麗如古詩、
資性溫良行篤敬、佛祖遺戒常自持、不尊人爵重天爵、
身潛顏巷下董帷、東大寺畔學林茂、戒壇院上徳華披、
古徳又有長壽福、一代八十二春移、豫州出此大人物、
我來問人皆不知、只言藤樹先生在、恰似燈臺不照基、
從今願明其事跡、百世永崇此國師、

藤樹先生は豫州の産にあらざるも、其豫州に縁故あることは何人も熟知する所なるが、凝然に至りては殆んど一人の其出身たるを知らざる、

は、燈臺本暗しと云はねばならぬ、

第三百六十七話 四國廻路

四國にて弘法大師の舊跡八十八ヶ處を一巡するを廻路と名く、俗にヘンドといふ、生涯一度は必ず巡拜すべきものとしてある、余が四國にあるや、正しく其期節であつた、一年中三四月の交が最も多い時である、其有様を詩を以て寫した、

行旅幾群來去頻、看過八十八場春、
草鞋木杖君休笑、
我亦今年遍路人、

第三百六十八話 鼠軍破扇心

豊前國會根村に宿泊せし時、夜中鼠軍に襲はれ、安眠することが出来ぬ、依てマツチをつけて探り見るに、扇子の中央を鼠の爲に破られたるを認め、左の詩を賦した、

物音驚客夢、燈暗夜沈々、
磨燧探窓底、鼠軍破扇心、

其前に豊後日田町大藏某氏所藏平野五岳筆書畫帖に野狐禪の題字ありしが、鼠其首字を喰ひ去りて、狐禪の二字だけ残つた、その事を記せよとの依頼に應じ、左の詩を賦して與へたこともある、

野狐失其首、狡鼠以醫飢、
問我是何兆、吉凶天獨知、

第三百六十九話 醉佛の歌

大隅國財部に一僧ありて、甚だ酒を嗜む、余に雅號を附せん事を乞ふたから、醉佛と命名した、且つ添ふるに和歌一首を以てし、醉過ぎて無念無想の境界に入りし人こそ佛なりけれと書いて與へたことがある、

第三百七十話 柿の贈物に答ふ

九州を巡遊し了りて、門司より將に歸京の途に上らんとせるに際し、知人より柿實を餞別に贈つて來た、因て之に狂歌を賦して答謝した、

字をかきて恥をかきたる紀念として柿の土産をもらいけるかな

第三百七十一話 五色の歌

去る歳四五月の頃和州宇智吉野兩郡の山間を旅行せしが野外の景色が自然に五色に染め上げたる様に見えたれば、

樹は黒く、麥は緑りに、菜は黄なり、桃紅李白春の山里

と讀みたることがある、又信州木曾地を通過の際蕎麥の畑にあるを見て、

根は赤く、莖は黄色に、葉は青く花の白さに結ぶ實は黒とよみ、五色の歌を作つた、

第三百七十二話 目出度句

人あり余に目出度語にして、而も一讀人をして笑はしむる句を書せんことを需めた、因て左の語を記して與へたことがある、

口を開けばアソコ餅が飛んでくる、門を開けば福の神が舞ひ込

第三百七十三話 森林の西洋洗濯

北海道客中根室より厚岸に出づるの間、丘陵起伏し、森林繁茂し、馬上にて林中を通過するに、技葉顔を摩し、頭を撲ち、帽を飛ばすこと數回に及ぶ程であつた、人呼びて之れを西洋洗濯と申して居る、時に余の二吟がある、

一路乗風入翠微、雨過澗底水聲肥、深泥沒脚馬難進、

低樹摩顏帽欲飛、楓落秋高醉霜酒、岩根雲冷擁苔衣、

遙聞足響疑熊到、何料牧童引犢歸、

第三百七十四話 世界一週の詩

明治三十五年より三十六年の間、世界一週當時の詩がある、左に掲げて見やう、

立志會辭文字關、凝眸先認對州山、紅日沈邊或吳越、
 白雲宿處是臺灣、數帶廣東山作波、一條香港峽如囊、
 安南海上風波惡、印度洋中日月長、舟入亞丁山漸見、
 路過蘇士暑將無、客身猶在地中海、夢境已開歐米都、
 花明巴里城頭路、月照倫敦橋下船、獅子岡頭尋古跡、
 海牙街上訪前賢、伊國三冬草已青、瑞山八月雪猶白、
 吟裏坐花維納春、醉餘步目伯林夕、露北野如烟海濶、
 大西波似亂山堆、看盡米山加水勝、歸舟更向日東來、

第三百七十五話 自作の格言

古來の格言訓語が今日に適せざるもの多きを見、淺學ながら自ら格言を作り、集めて一小冊子とし、自家格言集の表題にて、世に發表してある。此には其の中より數句を抜いて掲げて置く、

浮世非夢、事々皆眞、
 樂而迎老、笑而迎死、
 鷄告晨、犬守夜、人而無用則不及鷄犬遠矣、
 花落留實、人死留功、
 月缺則有滿時、人窮則有達時、
 人情如海有深淺、世路如山有高低、
 善人爲惡人拂租稅、
 惡人如貓眼、向明則縮、向暗則張、
 官吏吸農夫之汗、富人吞貧民之淚、
 心爲形役、是馱馬耳、身被名牽、是時籠鳥耳、
 少時貧暖則老後寒矣、
 紺屋不染衣、醫者不衛生、僧家不修身、

日出則勤甯上、日入則笑燈前、是農家之日課也、
不勞而衣食、是盜衣食者也、

第二十三類 滑稽頓智

第三百七十六話 心理療法

余嘗て醫家の生理療法の外に心理療法あることを主唱した、其後神經衰弱症にかゝり、自ら經營せし學校を退隱するの止むを得ざるに至つた人あり、詰問して曰く、何故に心理療法を實施せざるやと、余曰く此退隱の一事即ち心理療法であると、或人之を評して、此一問答は禪家の好公案なりと云つた、

第三百七十七話 不動の字解

舊哲學館の敷地を擴げるに當り、其地内に成田不動を祭れる小宇が

ある、之を命ずるに他の地に移轉せよといふを以てした、講中總代來りて移轉は出來ぬとの挨拶である、何故かと詰れば、不動様なるが故にと答へた、余一案を運らして曰く、動かざるが故に不動なるの理は尤もである、されど成田不動とあるは如何、此四字は田になすならば動かすと讀むべきである、然るに今回は學校の敷地にする爲にして、田にするにあらざれば、たとひ不動と雖も動かざるべからずといひて、互に大笑ひしたことがある、

第三百七十八話 伊豆の説

先年余が伊豆半島を周遊せし時、伊豆人間ふに伊豆の名稱の由來は如何と、余戯れて答へて曰く、伊豆の義たるや古來二説ある、其一は伊豆は出づるの義にして、其國長く海中に突出するに山るといふも、其當を得ない、我國の半島國は決して伊豆に限らぬ、房州能州皆半島である、其

の二は伊豆は湯出の義にして、出湯の多きに由るといふも、是れ亦面白くない、何者上州の如きは出湯の多きこと、豆州の比にあらざれば、湯出の名を伊豆のみに與ふる筈はない、又俗説に伊豆はこれ豆と訓し、其の國の小なること豆の如しとの意なりといふも、宜しくない、其故は日本中最小國は志摩にして、伊豆にあらざるを見ても知れる、余案ずるに伊豆の國たるや、山多く路險なること本邦中第一位に居る、斯る山地を旅行するには、下駄も靴も用をなさず、必ず草鞋を著けなければならぬ、草鞋を著けて旅行すれば、必ず兩足にマメの出来るは、遁れ難い、即ち足に多く豆の出来る國なりと解するが最も適切と思ふと、是れは余の滑稽である。

第三百七十九話 門前の揭示

禪寺の門前には多く禁葷酒入山門の禁碑石がある、先年余始めて某

禪寺の境内を借りて居を營みしに、時々薪炭や食料を運ぶもの山門を通過して余が居宅に至る、寺僧之を喜ばずして、門前に荷車を引き入るゝを禁ずと揭示した、其後荷車依然として山門に入る、寺僧大に怒り、余が宅に來りて嚴しく其の不都合を責む、余曰く門前に揭示ありても、其通り實行するは難きものである、例へば葷酒山門に入るを禁ずと題しても、時々酒肉の門内に入ることあると同様ぢや、故に斯る事は寛假して置かれんことを望むと申したれば、寺僧赤面して去つた。

第三百八十話 氣のさかぬ間ぬけ

世の中に氣がさいて間のぬけたものがあり、又氣がさかずして間のぬけたものもある、越後三條町は毎朝夕、川水を吸み取りて飲料とする處で、下男に雇はるゝものは、必ず毎朝水を荷桶にて運ぶのが常業である、一人の愚鈍なる下男ありて、水を運ぶに慣れず、途中過半を外へこぼ

してしまふ、主人之に教へて、尻を振ればこぼるゝことなしと注意を興へた、下男謹て誦し、其後水を運ぶに、途中桶よりこぼるゝ毎に、其桶を地上に置き、獨り自ら尻を振り、暫時にして又桶を荷ひ、水の外に落つる毎に、前の如くして、大に人に笑はれたと云ふ話がある、間のぬけたといふものならんか否それ以上である、

第三百八十一話 哲學堂の判じ物

和田山哲學堂前に小便所を設け、之に標記するに尾無毛泉不白の六字を以てした、此に遊ぶもの一人も之を判じ得ぬ、依て一々説明する必要が起つた、尾に毛なきは尸なり、泉の白を缺けば水となる、之を合すれば尿字なる譯で、尿の字を代表したのである、

第三百八十二話 理窟家

日本人は概して理窟家の方である、而も屁理窟に長じて居る、汽車中

に車内禁煙と掲示し置けば、窓より顔を出して喫煙するものがあつたさうだ、又電車中の注意の一箇條に「フト股出スト」と記してあれば、太い股を出だすこと出来ぬも、細い股は出してもよからうと話し合ふた人もあつたといふことぢや、

第三百八十三話 偶然の滑稽

出雲にて人の間に對し然諾する時はソーデスといひ否定する時はイヤデスといふが彼方言のさまりである、余或る小學校教員に向ひ、君は此の村の出生かと尋ねたれば、イヤデスと答へた、余は松江近在に揖屋驛あるを知れる故に、揖屋の出生なりと心得されば、松江在の停車場の所在地が君の郷里かといへば、又イヤデスと答へた、後にイヤデスは打消の語なるを知りて、漸く領解した、是も偶然の滑稽である、

第三百八十四話 假名の讀違ひ

上州伊香保温泉にて聞きたる話に、高崎近在に南たかさみち、北かねこみちと刻したる道標がある、旅客之を見てナンダカ先道、キタカ猫道と讀んで、更に解し得なかつたと、是れも一場の滑稽である、

第三百八十五話 車夫の誤解

余先年京都に在りて、某月十三日に教育會を訪はんとし、其の事務所の三條裏通にあるを聞き、人車を雇て此に至つたことがある、車夫曰く、何處へ行きますかと、余曰く教育會と、車夫曰く、十三日なりと、余は車夫が何の爲に十三日と云ひたるを解せず、斯くして走ること數十歩、又問て曰く、檀那何といふ家に至るか、余曰く教育會と、車夫又曰く、十三日なりと、是に於て始めて車夫の余の言を誤解せるを知つた、即ち車夫は教育會といふことを聞き、今日は何日と解したのであつた、

第三百八十六話 忠孝主義

余は食事に香々を好み、間飲に焼酎を擇ぶ、人其の故を問ふから、曰く余の執る所は忠孝主義にして、耐は忠に通じ、香は孝に通ずる故なりと答へた、是れは余の獨特の滑稽である、

第三百八十七話 誤讀の僻解

或る人義捐金を義損金と讀み、義理にて損をする金なりと解し、演題未定を未定と讀み、未に定むるの義なりと解せしも面白し、

第三百八十八話 クサイの理由

肥後人は言葉の尻へクサイといふ語を添へて話をする癖がある、例へばヨカクサイ、ソダクサイ、バッテクサイといふが如く、語尾の添言葉にクサイを付ける、或人が肥後人に向ひ、何故に談話中にクサイクサイを度々いふかと尋ねたれば、其答に他國人は返事にへい、へいと繰り返す故であるといへるも面白い、

第三百八十九話 余の書風

余生來書を學びたることなく、隨て無類の惡筆である、故に固く禁筆を守りて、揮毫の需に應ぜざりしが、明治二十九年自ら創立せる哲學館が全燒の災にかゝり、百計此に盡き、本意に背きて禁筆を解き、學館再築を助成しらるゝ諸氏に御禮として、揮毫を呈するの内規に定めた、其縁故て哲學堂維持費を集むにも、字を書いて差上ぐることにした、爾來人より何人の書風を學ばれたりやと尋ねらるれば、余は之に對して提灯屋流なりと答へて居る、他日和田山哲學堂内に筆塚を築きて揮毫罪を謝する心得である、

第三百九十話 師匠兼弟子

大和宇陀郡内巡遊中、余に幾人の弟子ありやと問ふものがあつた、何の弟子かと聞けば、書の弟子のことだといふ、ツマリ澤山の弟子を有す

る書家と思つたらしい、余之に答へて師匠も一人、弟子も一人と申し、更に其一人の弟子は何處に居るかと問ふに對し、其弟子は此に居る、即ち師匠兼弟子であつて、余の外には一人の師匠もなく、一人の弟子もないと答へて、笑ふたことがある、

第三百九十一話 大佛の比較

八王子のものが奈良に遊び、大佛を見て評して曰く、此大佛は我小佛よりも小さい、小佛の長さ一里ありと、小佛とは甲州街道の小佛峠のとちや、又五島の者が奈良の大佛を拜して曰く、其身長我漁する所の大魚に及ばざること慥かに二寸なりと、人其故を問へば、一は金にして一は鯨なればなりと答へたる由、

第三百九十二話 オソメ風

明治廿四年一月頃、東京にインフルエンザ病の大に流行したことが

ある俗間に之をオソメ風と名け、之を避くる法は家の入口に「久松は居らず」と書き、張付置けばよいとて、處々に其張出を見た、是れオソメ久松より出でたる滑稽である。

第三百九十三話

日本中の山なしの國

余戯れに學童に尋るに、日本中の山なき國あるを知る乎といふを以てした、學童答へて曰く、下總であると、余曰く下總には成田山あり、流山ありて、山の數頗る多い、而して眞に山なき國は甲州一國あるのみと、學童曰く甲州には白峯山、天目山、身延山等ありて、日本中最も山の多き國であると、余曰くされど甲州を山なし縣といふにあらざると、是れ亦一場の滑稽である。

第三百九十四話

漢字の調法

漢字は音の似たるもの多く、爲に誤解を招くことあるも、亦調法の場合

合もある、先年日露開戦の際、九州の一人が尋るには、此頃日向の國に天より灰を降らせし一怪事があつた、日向は日本の根源地にして、神の天降りし場處である、其地に降灰ありしは、必ず深き神意の存するに相違なからう、即ち我天祖が日露の勝敗を我等に示されしものと思はる、案ずるに灰は敗と音相通し、降は降参と熟する字である、されば我軍敗れて露に降参する前兆であらう、是れ不吉の兆てはないかと申した、余之に答へて、是れ大に祝すべき吉事である、何者灰は破夷と通し、灰降は破夷降の意にして、露西亞の夷狄を破りて降参せしむるの前兆であると申したが、戦争の結果を見れば、余の判断の當れるを知つた。

第二十四類

失策笑語

第三百九十五話

蕎麥の薬味

薩摩及び日向にては蕎麥に薬味を添ふることがない、東京人が先年日向の旅店に一泊し、蕎麥を命じたるに、蕎麥は結構に出来たるも、其味を助くべき薬味なき故、山葵か唐辛を持ち來れと命じたるも、更に言葉の通ぜぬやうなれば、語を換へて辛いものを摺りて持ち來れといひたれば、漸く分りたる様子にて、暫時過ぎて白色を帯びたるものを澤山皿に盛りて持ち來つた、試みに之を味ふに甘味あるも辛味がない、更に聞き正して始めて甘薯を摺りたることが分つた、九州にては甘薯を摺りたることが分つた、九州にては甘薯をカライモと申す、因てカライモノを摺つて持ち來れとの命に應じて、カライモを摺りたるのであつた、随分あり得べき間違である、

、第三百九十六話 サイダの誤解

余が近年九州筑後川の沿岸を巡遊したる時、或る旅館にてビールも

あり、ラムネもあるから、サイダもなかるべからずと思ひ、下女に向ひサイダは此に來て居るか、と尋ねたれば、四五日前に御出になりましたと答へた、是れ下女がサイダの名を知らざる故、其地に齋田と名くる人がある、其人の去來を尋ねたるものと解したるも、おかしかつた、

、第三百九十七話 鳥栖停車場

九州鐵道の長崎線と熊本線との分岐點に鳥栖と名くる驛がある、此名は元來田畑の小字同様の地名にして、其地方の人にも知られざる程なりしが、鐵道を布設せられて以來、俄かに市街をなし、樞要の驛となつて、然るに其地方の文字なき老婆の如きは、鳥栖とは停車場のことなるとのみ心得、福岡に至りし時、人に向て停車場の所在を問ふに、トスは何れにあるかと尋ねたといふ奇談がある、

、第三百九十八話 電報の間違

奥州人が病人をつれて病院に入るの手續をなし、其家へ向け「イマ入院シ」ンダとの電報を發したるに、一家大に驚きて、急に親類と申合せ、屍骸を引き取りに行きたれば、入院濟んだの間違であつた、奥州人はシとスとを混同して、辨別する能はされば、スンダとシンダと誤りて打電せし故である、又雲州にては人の來りたるをキラレタといふ語習がある、同國人或る地方に在勤し、縣知事汽船にて來着せるを縣廳へ打電して、「イマ知事船ニテキラレ」と傳へたる爲に、大に縣廳を騒かしたといふ話もある、

第三百九十九話

精進と西洋人との間違

曹洞宗管長一行十四人が九州巡教の途次、長崎市に臨時一泊する都合となり、旅館へ打電して、今夜精進十四人トマル用意セヨと命じた、蓋し坊主十四人とも書き難ければ、精進と認めたるものらしい、つまり精

進料理十四人前用意せよとの意を含めたのである、然るに此電報を受取りたる旅館は精進を西洋人と解し、急にクックを雇ひ、西洋料理の準備をなして待ち居たりとの奇談もある、

第四百話

演説の誤解

余長崎縣南高來郡内にありて、演説中靈魂の説明をなせしことがあつた、聴衆は靈魂の語を解せずして、連根のことと誤解した、又恒河の流域二千万マイルと述べたるに、マイルを解せざるものありて二千萬里と誤解した、演説の用語は聴衆の如何によりて加減する必要がある、

第四百一話

記憶の誤

記憶の誤は多く連想の混同より起るものだ、一米人始めて日本に來り、朝時人に會するとき、グロドモーニングといふべきを日本語にて何んといふかを尋ね、オハヤウといふことを教へられた、翌朝人に會する

毎にオハヤウといはずして、ニューヨークといひて挨拶したりとのこと
とちや、オハヤウもニューヨークも米國の地名なれば、二者を誤りて記
憶した爲である、之にひとしき話は、或人余に向ひ越後に雜炊町と名く
る處ありといふも、余は解することが出来ぬ、暫くありて小千谷町を雜
水町と誤りて記憶せるを知り得た、是れ皆連想の相違より起る誤りて
ある。

第四百二話 寢言の功能

或る別荘が四鄰家なく、田園中に孤立して居る爲に、時々竊盜の忍び
入らんとすることがある、此に住する番人の中で、深夜高調を以て寢言
を發する癖のものがあつた、其癖を知らざるものは、何事の起りたるや
と驚かざるゝ程である、或る夜竊盜が戸をはずして忍び入りたるに偶
大聲にて怒鳴るが如き寢言に會し、其寢言なるを知らざれば大に恐れ

一物を竊取せずして逃れ去つた、然るに一家全く之を知らず、翌朝起き
て戸の開き居ると、室内に足跡あるとによりて、竊盜の入りたるを知り
得た、是れ寢言の功能と申す可きものぢや、

第四百三話 地藏の本願

豫州桑原村字畑寺に泥打地藏と名くる石地藏が田中にある、其側を
通過するもの必ず泥を握りて地藏尊に打かくることになつて居る、こ
れ地藏尊の本能であるといふはおかしい、千葉縣に石地藏を橋にかけ
て、之をふみ渡るを以て地藏尊の本願なりと唱へ居るに同じ、又豫州道
後村に粉付地藏がある、之を禮拜するもの、オシロイの粉をふりかくる
も奇怪である、粉付とは子好より轉訛したるものならんとの説ぢや、

第四百四話 温泉の失策

余嘗て長州大津郡深川温泉に入浴を試みしことがある、時正に嚴冬

てあつた温泉にオン湯レイ湯の二種あるが、いづれの方に入浴するかを問はれたれば無論オン湯に浴すべしと答へた、然るに温度低くして寒氣に堪へ難い、更にレイ湯の方を探れば、温度頗る高い、怪みて其理由を尋ねしに、オン湯は恩湯とかき、レイ湯は禮湯とかき、温冷の意にあらざるを知り、思はず一笑を喫した。

第四百五話 田舎老婆

田舎より東京に上りたる老婆が、街上の自動電話所を小便所と心得尻をからげて、其中に入りたりとの話があるが、是れは維新前始めて西洋に行きたるものが、街上の郵便函を小便所と心得たると好一對の失策談である。

第四百六話 吉野山中の彌次喜多

和州吉野郡内に高見村といふがある、其村の人家を離れて約五六丁

の山腰に禪寺がある、夜中此に開會せしに、演説會の終るや俄かに驟雨が降り來つた、時に旅宿に歸らんとするも、雨具の用意がない、其寺に備ふる傘は既に他の人がさして去つた、因て住職が我家には雨を防ぐの好具ありとて、葬式に用ふる赤色の大傘を持出し、之を下男にさしげさせ、洋服のまゝ送られて歸合せしは、吉野山中の彌次喜多談である。

第四百七話 一トウ馬車

奥州の青森及び南部地方は、旅行に多く馬又は馬車を用ふる所である、余の淺蟲温泉を發して野邊地に移らんとするや、其當時未だ鐵道の便あらざれば、馬車に依らねばならぬ、旅館にて馬車の用意を命じたれば、一トウ馬車か二トウ馬車かと尋ね來つた、其賃銀を聞けば一トウの方が安い、價安くして一等ならば、無論一トウ馬車を用意すべしと命じた、後に聞けば一トウとは一頭引きの馬車のことであつた、惡道且つ遠

路にて馬車送巡として進まざるには閉口した、

第四百八話 箱根の旅館

余が箱根温泉の某旅館に滞在せし時、毎日食事の給仕に来る女中の一人は、其名をコメといひ、一人は其名をミソといふを聞き、面白き名を付たものだ、世の中はコメとミソとがなくては一日も生きて居られぬと思ふたが、よく聞正して見たれば、クメとミスであつた、

第四百九話 茶話會

近年地方にて懇親會に酒食を廢し、茶菓のみを用ふる風が行はるゝが、之を茶話會と申す、此に、一奇談がある、北國の某村にて演説後に澤會ありと揭示してあつた、余は其意を解するに苦み、再三熟考して始めて澤は茶話と普通の點より誤れるを知つた、是れ一の判じ物である、若し茶話を澤と書するならば、哲學を鐵學と書し、博士を墓世と書しても宜

い、昔し田舎の者が酒代の催促に、大の字を倒まに書き、せの字を横に書いて請求したといふ話がある、即ち之をサカダイヨコセと讀むつもりぢや、又或る百姓が音の字はザツにかくよりも、丁寧に書く方が價が易い、ザツにすれば七百とかくべきを、テイネイにすれば六百とかくと申したとの滑稽もあるが、今日尙ほ之に類したることが多い、

第四百十話 風呂の立往生

先年長州美禰郡の某寺に行きて雪中宿泊せしことがある、其寺に風呂場がないとて、他より風呂桶を借り來り、庭前の雪の中に置いて湯を沸かし、余に入浴せよとの案内を受けた、其日は雪のふる位であるから、非常に寒い、早く一浴して煖まりたいと思ひ、急ぎて湯に入ると、桶の底に損所を生じ、二三分を待たぬ内に湯が外に流れ盡くし、一滴もないやうになり、桶の中にて立往生したことがある、昨年信州下伊那客中にも

之にひとしき彌次喜多を演じた、

第二十五類

雑談雑類

第四百十一話

圓了と遠慮

余の實名は圓了である、圓了と遠慮とは發音が似て居る、故に人は余に酒食を勧めるときに、お名前が圓了であるから、遠慮なさいといふ、余は之に答へて名實不相應の事は世の中に澤山ある、例へば晝寒くてもヨ寒といひ、朝香む茶をパン茶といひ、一羽居る鳥でもニワトリといひ、一本かゝりたる橋をニホン橋といひ、一ツにてもマン頭一枚にてもセシ餅一箱にてもヂウ箱、晩につけたる漬物をアサ漬といひ、秋とれる魚をサンマーといひ、早ツケギの数が少くともマツチといふの類、皆名實不相應である、之と同じく余の名は圓了なれども、トント遠慮の出来ぬ方

であつて、名實不相應であると申しした、

第四百十二話

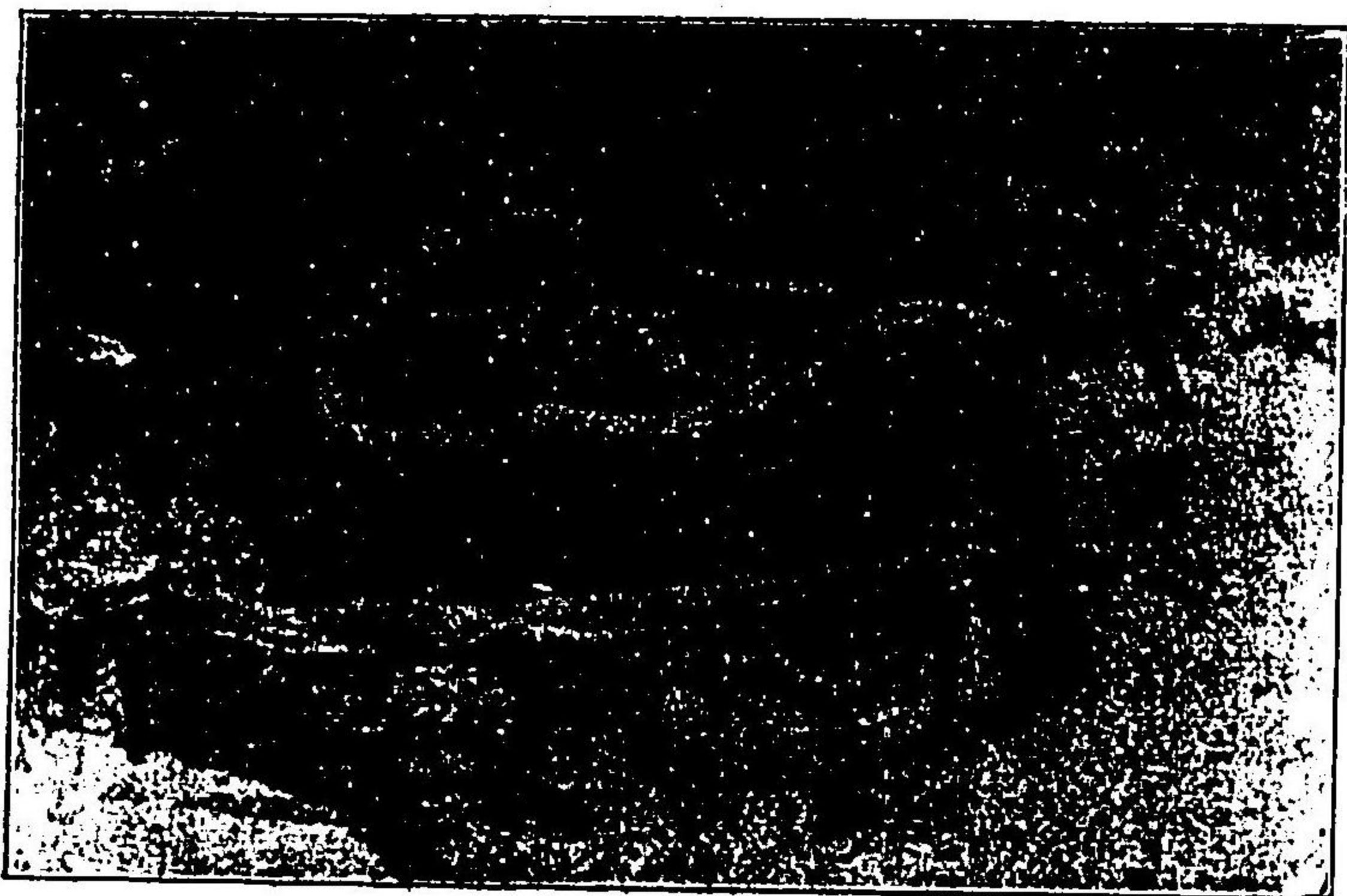
朝鮮の三長

其國其土地に各特長があるものだ、余が朝鮮にある時、人に向て此國の特長は何々であるかと尋ねた、其人答へて三長あると申す、其一々を擧げて第一は煙管が長い、第二は顔が長い、其三は氣が長い、是れ朝鮮の特長であると述べて聞かした、

第四百十三話

我邦の三毒

佛教に三毒といふ語がある、吾人の有する食欲と瞋恚と愚癡とを合して三毒と申すが、此三者が吾人を苦める爲である、我日本にも三毒がある、北海道の熊と、沖繩縣のハブと、臺灣の生蕃とは、人を殺す毒物であるから三毒と申して宜い、其中にて最も厄介の、は生蕃征伐である、彼は人首を齧するを以て無上の名譽にして、且つ至樂として居る、臺灣人



が生蕃を招きて饗應し、其去るに及んで途中まで見送りたるに、其當人の首を斬りて歸つた。是れが彼等に取りて第一のミヤゲ物であるさうだ。又臺北に内地人にて生蕃の婦人を妻として居るものがあるに、離縁を命ぜるとしければ、其婦曰く、何時にても首を切て渡せば離縁すべしと、是れには閉口して居るとのことぢや、

第四百十四話 太古の遊

先年北海道一週の際、北見の沿岸を數日間かゝり、馬上にて旅行したること

があるが、或日湖畔のめづらしき絶景の處に出たれば、一休せんと思ふも、茶店がない、其の内に一軒の貧しき漁屋を見受けたれば、之れを借りて休息した時、已に正午に近ければ、喫飯せんとするも、食品の備がない、幸に米のあるを聞き、老婦に之を炊かせ、更に老爺に命じて魚を釣り、遺し、暫時の後飯と肴とを得、爐を圍んで板の間にアグラをかき、老爺が山に入りて度々熊に遇ひて九死に一生を得たる實驗談を聞いて遊んだことがある、是れ太古の遊といふべきものであらう。

第四百十五話 風流の遊

先年長崎市小島の寺院に寓居したことがある、偶々秋晴春の如き好天氣に會したれば、其寺の住職と醫師と余と三人申合せ、一簞食一瓢飲を携へ、八景の峯と名くる處に登つた。天を屋とし、草を筵とし、住職は庵を築き、醫師は庖丁を執り、余は薪を拾ふて、終日の壯遊を試みたことがあ

るが、近來めづらしき風流の遊びであつた、

第四百十六話 殘念の遊

余が或る山間に滞在せし時、好風晴日、一天雲なき秋期の彼岸日和に會したれば、藪狩を試みんとて、兩三人相伴ひ道すがら木の子を探りつゝ、高峯の下に達したや、がて山上にて木の子料理で喫飯せんとて、鍋釜酒醬油を人夫にかづかせて行いたから、幸に木の子も取れ、腹もへりたれば、是より峯頂の見晴のよき處にて一休せんと、勇を鼓して絶壁を攀ぢ、將に絶頂に達せんとする時、人夫が石につまづきて仆れ、其携帶せる食器飲物悉く谷底へころげ落し、酒も醬油も茶も木の子も皆谷川の急流にながしてしまふたことがある、其殘念さは今に忘れぬ、

第四百十七話 雲助と慶安

舊友荒川義太郎氏が長崎縣の知事をして居る時に、三十年振りに長

崎に於て面會した昔時大學寄宿舎にて共に燒薯を屠つたことあるを思ひ出し、今日にありて一方は知事の榮職にあり、一方は南船北馬、東去西來、雲助同様の生活をなし居るの相違あるを見て、一詩を工夫した、

崎陽一夕相逢處、想起當年同食薯、歎息人生轉變多、

君爲知事吾雲助、

荒川氏之を讀みて、君が雲助ならば僕は慶安だ、知事の役は慶安のやうなものぢやといはれて、互に笑ふたことがある、

第四百十八話 達磨と美人

或人一幅の達磨と美人と背坐する圖を携へ來りて、之に贊をせよといはれたから、一詩を賦して題したことがある、

世間多是競豪奢、憐殺少林貧達磨、九年面壁背花坐、

不知春色在誰家、

又一人あり、同じ圖を持ち來りて贊を需められた、依て

達磨與美人相背坐、此間消息亦教外別傳也、

と題したれば、大に喝采を得た、

第四百十九話 普通の間違

先年余が一論を草し、之を題して排孟論と定めたが、其意は孟子を排する論といふつもりなるに、人之を見て孟子と論語とを排するものとして解した、是れはまだ左程の間違にはあらざるも、其後破唯物論を著はしたるに普通の間違より、廢佛論と誤解せられ、わざ／＼書面を以て、君は平素佛敎の保護者として歓迎して居たが、今度廢佛論とか云ふものを書いたさうだ、果して然るか、と詰問されたことがある、

第四百二十話 偏狂の種類

越前に偏狂者があつて、己れの洩らしたる大便中に、若し消化せざる

ものありては天物を濫棄する恐あればとて、其都度之をかきまはして居た、長州に偏狂者がありて、毎朝起るとき、起きた方がよいか、寝て居た方がよいかに惑ひ、褲中にありて、一時間も二時間も苦悶して居た、又能州の僧侶に偏狂者ありて、人の需に應じて讀經するに、其經を讀むこと長すぎても悪く、短か過ぎてもよくない、其長短の度を定むるに苦むといふて居た、又石見に偏狂者ありて、一夕金百圓を拾ひ得たるを夢み、醒めて後、若し眞に之を拾ひ得たる場合あらば、其金を如何にすべきやに、三晝夜以上眠らずに考へたといふものがあつた、而して他の點に於ては毫も平常人に替ることがない、此等の偏狂は余の巡回中直接に出遇ふたものである、偏狂にも種々あるものだ、

第四百二十一話 風俗習慣の相違

日本人は朝鮮人の客の前にて便器を置いて尿をなすを見て、其不潔

を笑ふに對し、朝鮮人は日本人の客の前にて痰器を置きて、之に痰を吐くを見て一層不潔であると申す、其故は痰中には微菌あれども、尿中には微菌なしとは、一理なきにあらず、又朝鮮人は日本人の大便秘毎に出て、手を洗ふを見て、糞紙の代りに手を用ふる爲であると想像して居るとは意外の推測だ、

第四百二十二話 街上の賣聲

街上の賣聲は其土地に永住せるものにあざれば、聞き取り難きものである、地方より始めて東京に移住し來り、街上にオワイ〜と呼び歩く聲を聞きて、野菜か魚類の賣聲と思ひ呼び止めて買はんとせしに、肥桶をかつぎ居たるに驚いたといふ話がある、

第四百二十三話 臺灣の小學兒童

臺灣にては、内地人の兒童を教ふる方を小學校といひ、本島人即支那人種に屬する方の兒童を教ふる方を公學校と名づけてある、始めて公學校に入る兒童には大小便の仕方より教へ込まねばならぬとのこと、

じや、彼等は自宅に便所ありても、板を二枚竝べたるまでのゝが多い、左なれが丸い穴が明いて居る所にて用を便することになつて居る、其故學校に入りても、内地流の便所に入りても遣り方が分らぬ、大體金隠しの方に尻を同けるそうだ、依て入學したる兒童に便所のことより教へ込むものとすれば、中々煩らはしいものである、

第四百二十四話 臺灣人の紙を重んず

内地人は便所より出るときは必ず手を洗ふ習慣なるが、其の代り文字のつきたる紙にても構はず、拭糞に用ゐて居る(昔は然らず)、然るに臺灣人は支那の習慣を傳へ、文字の存する紙は之を大切にし、如何なる反古にても不潔のことに用ひざるは勿論、塵芥中に捨つることをせぬ、必

ず一定の紙を焼く石燼せきじんを設け、其中へ入れて焼棄やちすることにさまつて居る、然らば拭糞しつふんには何を用ふるかといふに、石コロでも、土クレでも、木片でも、其側にあるものを取つて用ふ、就中竹枝又は竹のへらを用ふるものが最も多いさうだ、

第四百二十五話 糞紙の代用

今日猶ほ僻地へきちにては拭糞に紙を用ひぬ處がある、或は藁わらを用ひ、或は草の葉を用ひて居る、鹿兒島及宮崎縣の山間部にては、竹のへらを用ふる處が多い、飛驒ひょうたの國にては木の小片を用ふるが之を佛木と名くるは奇怪である、其の理由をたづねても知る人がない、一説に此木片を使用したる後、川の中へ投げ込むに段々流れて越中ちゅうちゅうに入れば、之を拾ひ取りて佛にさし上る御飯ごひを盛るシヤモンに用ふる故であるといふも信じ難い、又他國にて糞を拭ふに紙を用ふるに對し、カミは神と普通の黠あつり、ホトケと名づけたりといふも滑稽くわきであらう、

日本週遊奇談 終

奇談珍説滑稽百態、類を分つ二十有五、話を累ぬる四百二十五、而して太陽出入を起首とし、黄紙代用を結尾とす、鞋痕舌跡首尾照應、讀者をして愚術を外し、臍宿を轉せしむ、蓋し妖怪博士獨得の術術妙用、眞に是れ長生不死の仙訣と言ふべし、生、先生に知あり請ふて割腕の校合に任ず、今其結尾に臨み、思はず贅言を餘白に附す、

多暉

辛亥五月下澣

内山幻堂記

明治四十四年六月十日印刷
 明治四十四年六月廿一日發行

(日本遊奇談)
 定價金七拾錢

著者 井上圓了

發行者 大橋新太郎

印刷者 飯田三千太郎

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

著作
 所有

發行所

東京市日本橋區本町三丁目

博

文

館

振替貯金口座東京二四〇番
 販賣部電話本局二六二〇番

類書談奇探友の机淨窓閑

押川春浪君著(四六)菊宮書局(八) (八)

● 世界無銭旅行

正價全世一錢 郵税金六錢
書中險山あり、漚流あり、妖女あり、俠士あり、忽ちにして蠻境の怪月、つちにして大汽船甲板の叢枝、千變萬化の奇勇旅行は何人も痛快を叫ばずに居られまい

松川木公君著(菊)菊宮書局(八) (八)

● 樺太探檢記

正價廿八錢 郵税六錢
鮪の鉦屑▲波高く夜は暗し▲海馬島の四時間▲上陸難▲糞柱▲胆腑斷密獵船▲十三人の士雜居す▲ギリヤーク人の家▲千兩酌婦のお富▲南の秘密北の秘密▲鯨魚の壯觀外痛快記事數十章

(行發館女博)

河岡潮風君著 小杉未醒君畫

● 五洲快奇譚

正價五拾錢 郵税八錢
▲鐵腕の船長▲南國横行記▲海賊帆走船▲水中別天地▲黒手脅迫狀▲シヤムの象狩▲痛快男子▲比律賓の少年▲猩猩海上暴行▲ハワイ鯨獵▲小便の十六日▲海蛇の冒險▲大河突破四青年▲へべれけ閣下▲密貿易一行▲沈み行く船の悲劇▲帝國水兵約退治

岡 雷平君著 (全一册)菊半載三一六頁)

● 南洋珊瑚島探檢記

正價參拾錢 郵税四錢
神戶又新日報評 やまと新聞記者岡雷平氏の實験談にして實に一昨年十二月五日雲鷹丸(四百四十八噸)に乗じて備に辛酸を嘗め盡して探り且つ試みたる冒險物語なり尋常一般の探檢小説と同一視すべからざる珍書なり

類書談奇探友の机淨窓閑

江見水陸君著 (菊半載四二八頁)

● 探檢女王

正價四拾五錢 郵税四錢
○海底女王○怪船美人○龍の化身○天幕生活○窟の妖女○悪魔の家○島の姉妹○秘密の匣○生蕃復讐○怪鳥の娘○漂流少女○無名王國○海獸獵者○戦の飛沫○鰐魚退治○捕鯨探檢○富士相撲

江見水陸君著 (菊半載三九〇頁)

● 少年探檢隊

正價卅八錢 郵税六錢
▲殺人島▲七銅鑛▲秘密國▲類人猿▲怪人種▲大貨庫▲島の寶▲東光丸▲風行事▲隠れ島▲七ッ釜▲老船長▲火賊來▲熊退治▲海賊來▲陸平行▲空中船▲穂坂行▲秘密隊

(行發館女博)

五大洲探檢家 中村直吉君共編
冒險世界主筆 押川春浪君

● 五大洲探檢記

四六列洋裝 各册三百頁 寫眞版挿入
正價各册四拾五錢 郵税各六錢
第一卷 ● 亞細亞大陸横行
第二卷 ● 南洋印度奇觀
第三卷 ● 鐵 脚 縦 横
第四卷 ● 亞弗利加一周
以下逐次刊行

本書は歐米の大旅行家をして顔色なからしめたる快男子中村直吉君の探檢記なり收むる處前人未發の大發見あり鬼神も驚く大冒險あり秘密國の真相あり船中の奇遇あり別離の悲嘆あり珍談奇聞百出して殆んど應接に遑あらしむ眞に是れ空前の大快著にして春宵秋夜唯一絶好の同伴たり

新洋行土產

巖谷小波君著 久保田米僊畫伯裝釘

全三册新形四六列表裝
金椀様入美本(函入)

正價 金壹圓卅錢 小包料 各八錢

先に伯林二年の觀察を洋行土產二卷に著して、爲に洛陽の紙價を貴からしめし著者は此度渡米實業團に加はつて在米三月間の見聞を新洋行土產として發表す著者が銳利なる眼光と輕妙なる筆致とは世に定評あり而して彼の實業團の渡米や亦本邦空前の舉なりとす本書他の外遊記に比して其の光彩を異にせるもの素より論を俟たざるべし

寫生 旅行 魔宮殿見聞記

田中洲人君著
最新 倫敦繁昌記

全一册四六列洋布 正價金壹圓
上製七三二頁 小包金八錢

大阪毎日新聞評 神戸又新の倫敦特派員たる著者が一種奇警の觀察と輕妙洒脱の筆致を揮つて倫敦の裏裏兩面を縱橫無盡に活寫せる通信を編次して一巻となせるなり本書に於て最も取るべき處は忠實によく倫敦の各種の社會を描寫し恰も一幅のパノラマを眼前に展開せる如き觀あらしめたる處にあり倫敦案内記としては蓋し其優なるもの一ならん

吉田博君著並函

正價金九拾錢
小包料金八錢

(行發館文博)

花つみ日記

文學博士 姊崎正治君著

全一册 洋裝四六列裝釘清楚コロタイプ及寫眞版三十二枚挿入
正價 金壹圓參拾錢 小包料金八錢

南イタリヤの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞てし日記一篇、その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して、佛敎を語り、ロマの寺院に聖敎會の生命活動を觀察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ、天然美術の記録宗教文明の評論として江湖の一讀を求む。

歐米漫遊雜記

鎌田茶吉君著

正價金四拾錢
郵稅金六錢

大英國漫遊實記

水田茶雄君著

正價金七拾錢
小包料八錢

(行發館文博)

小杉未醒君著

●發行所博文館

漫 畫 と 紀 行

全一冊洋裝菊判上製
紙數三百三十五頁
正金八拾錢
小包料金八錢

輕妙洒脫なる漫畫二百三十個外にア、下、寫眞版八頁挿入

次 目 畫 漫

同中觀笑外九圖
漫畫十二ヶ月
怪興十五題
春興十五題
盜畫十五題
狩生十題
書生十題
春の日記十題
○木會路の御夜
○上毛の秋嶽
伊豆給師の蠻勇
十五題

東京二六新聞評
此の書は未醒氏が最近に於ける諸新聞雜誌に載せたる漫畫及び紀行文を輯めたるものにて、卷頭に寫眞版の中にある機上は李白の詩をして巧みに俳諧的に畫きたり此の邊は氏の特色を最も能く發揮したるもの、一ならん吾人は氏に望むに其多作なるが爲めに亂雜に流れざらんやうに勉められんことを望むものなり木會路、御嶽詣、上毛の秋等は氏が書風に一段の進境を開きたるところあるを見る

紀行文た専門文士に對遜色なく書と相俟べきものなり

博 文 館 發 行 紀 行 類 一 覽

文學士 大町桂月君著

●關東の山水

全一冊
正價金六拾錢
小包料金八錢

露を吸ひ霞を喰ひ霞々乎として行き悠々然として止まる高山の巔窮谷の底健脚到らぬ隈もなく雲筆縱橫關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高士紙裘に躍動し雲烟机邊を繚繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生獨特の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折小杉未醒丸山晚霞高村眞夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上更に花を添ふるの觀あらむ

同 君 著

●行雲流水

全一冊袖珍
紙數三百頁
正價金參拾錢
郵税金四錢

大町桂月先生の近業數十篇を收む議論敘事抒情何くに往くとして可ならざるは無く高きを求めずして自から高く街はず俾らず風骨校々として氣韻生動す行雲流水の趣は當代の文壇獨桂月先生の筆にのみ見らるべし

文學士 大町桂月君著

●一簑一笠

正價金參拾錢
郵税金六錢

大橋乙羽君著

●續千山萬水

正價金五拾錢
小包金八錢

同 君 著

●續千山萬水

正價金五拾錢
小包金八錢

同 君 著

●耶馬溪

正價金四拾錢
郵税金四錢

同 君 編

●紀行文集

正價金七拾五錢
郵税金十二錢

岸上質軒君編

●續紀行文集

正價金七拾五錢
郵税金十二錢

同 君 編

●續々紀行文集

正價金七拾五錢
郵税金十二錢

新撰名勝地誌

田山花袋著

本書の特色

交通路に出て名勝を記したる事其一也。産業沿革にも出来得る限り注意を拂ひたる事其二也。つとめて新しき材料によりてこれを肥したる事其三也。旅行者の伴侶たらしめんが爲めに紙質を精選し、装釘を堅牢なしめし其四也。殊に最も特色とすべきは編者の足跡海内を踏く、山利水と雖も訪はざるなく其記述と排列と頗る精確を極めたる事是れ也。況んや處々に各名勝地の寫眞數十種を挿入して宛然人をして足其の地を踏むの思ひあらしむるに於てをや旅行せんと欲するもの各地名勝の分布を知らんと欲するものは來りて本書を見よ

目 書

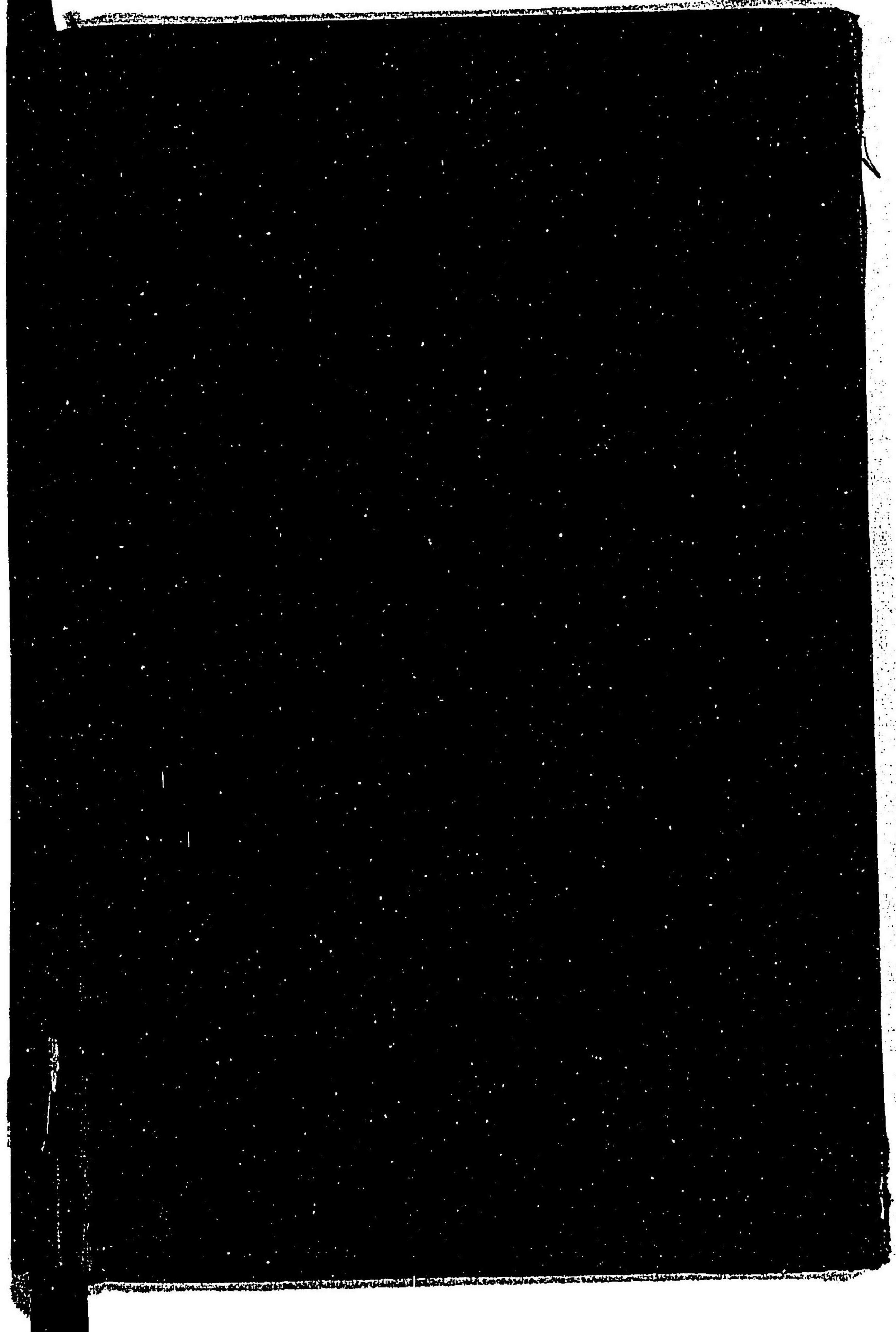
- | | | | |
|----|-------|-----|--------|
| 卷一 | 畿 | 卷七 | 山陽道 |
| 卷二 | 東海道西部 | 卷八 | 山陰道 |
| 卷三 | 東海道東部 | 卷九 | 南海道 |
| 卷四 | 東山道西部 | 卷十 | 西海道 |
| 卷五 | 東山道東部 | 卷十一 | 北海道及樺太 |
| 卷六 | 北陸道 | 卷十二 | 臺灣及琉球 |

全十二册

洋裝四六判洋布上製裝訂
頗美及此卷銅版精密
地圖及此版數十個挿入
紙數各册五百五十頁以上
印刷鮮明紙質精良

正價 各册 金六拾錢
郵費 各册 金八錢

(版出館文博)





027381-000-2

332-121

日本周遊奇談

井上 圓了 / 著

M44

ADJ-0141



